

# 萩之本遺跡

—平成 21 年度発掘調査報告書—

2011

財團法人元興寺文化財研究所

## 序

平城遷都 1300 年祭がおわり、古都奈良も静かな趣を取り戻しております。熱狂的な祭りの後で、今一度、自分達の足元を見直すことも必要なことでしょう。

今回報告させていただく秋之本遺跡は、日本国家が誕生する前史を語る上で重要な成果が得られました。縄文時代後期の営み、水田農耕が伝わった直後の生業と洪水災害、平安時代の土地開発…。いずれも、地道ではありますが着実に歴史を復元してゆく基礎資料となるものです。華々しい大発見や大規模な歴史イベントの影には、こうした地道な基礎作業が山のように存在し、そしてそれが日本の歴史研究の下支えをしています。言い換えれば日本歴史研究の懐の深さを形成しているのがこうした基礎調査・研究なのです。

いうまでもなく、遺跡の調査は発掘だけで終わるものではありません。出土した資料、採取した記録を整理し、報告書という形で公開することではじめて一段落するものです。こうした様々な負担のかかる一連の調査に、深いご理解と全面的なご協力をいただいた全農エネルギー株式会社様には深い感謝の意を表したいと思います。また、調査に際しては多くの関係諸機関、諸氏のご協力を賜りました。あわせて、この場をお借りしましてお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日  
財団法人元興寺文化財研究所  
理事長 辻 村 泰 善

## 例言

1. 本書は、萩之本遺跡における発掘調査の成果を纏めたものである。
2. 本書記載対象遺跡の調査原因は、全農エネルギー株式会社による事務所および給油タンク等の建設である。
3. 調査地は奈良県橿原市川西町 490-3, 491-1, 492-1, 493-1, 494-1 に所在し、開発対象面積 2944.04m<sup>2</sup>（うち建物面積 439.1m<sup>2</sup>）のうち発掘調査対象面積は 404m<sup>2</sup>である。
4. 調査は奈良県教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所が、平成 22 年 3 月 11 日～平成 22 年 5 月 10 日まで現地の作業を実施し、佐藤亜聖・桃井宏和が担当した。  
整理作業は調査終了後すみやかに着手し、平成 22 年度をそれに充當した。
5. 調査および整理・報告書作成にかかる費用は全額全農エネルギー株式会社が負担した。
6. 現地の実測および写真撮影は佐藤・桃井が行い、井上裕香・武田浩子がこれを補佐した。出土遺物の実測および清浄は佐藤・武田・村田裕介・仲井光代が行い、遺物写真は大久保治が撮影した（以上所属は全て（財）元興寺文化財研究所）。
7. 本書で示す方位は座標北を使用した。座標は世界測地系を使用し、国土座標第VI系を使用した。
8. 本書で使用した土色名は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）に準拠した。
9. 本書の執筆は 3 章 3 節を村田が、そのほかを佐藤が担当した。
10. 出土縄文土器・石器については岡田憲一氏（奈良県立橿原考古学研究所）のご教示を得た。帰属型式・器種については岡田氏のご教示をもとに佐藤が判断しており、全ての責は佐藤にある。
11. 本書の編集は佐藤が担当した。
12. 現地調査及び本書の作成においては下記の方々のご指導、ご協力をいただいた（順不同、敬称略）。  
宮原晋一・豊岡卓之・青木香津江・水野敏典（奈良県教育委員会） 岡田憲一・岡田雅彦・福西貴彦（奈良県立橿原考古学研究所） 齋藤明彦・濱口和弘・平岩欣太（橿原市教育委員会）

## 目次

1. 調査に至る経緯と調査体制	1	(3) 出土遺物	17
(1) 調査に至る経緯	1	第1 遺構面検出遺構出土遺物	17
(2) 調査体制	1	第2 遺構面検出遺構出土遺物	21
2. 周辺における既往の調査と課題	2	縄文時代の包含層出土遺物	26
3. 調査の成果	5	第3 遺構面検出遺構出土遺物	29
(1) 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定	5	その他の出土遺物	30
(2) 検出遺構	7	4. 調査のまとめ	31
第1 遺構面検出の遺構	7	(1) 縄文時代後期～弥生時代前期の萩之本遺跡	31
第2 遺構面検出の遺構	7	(2) 素掘小溝にみる土地利用	31
縄文時代の包含層	15	(3) 今後の課題	33
第3 遺構面検出の遺構	17		

## 挿図・表・写真図版目次

図1	調査地の位置 (S : 1/25,000) .....	2
図2	既往の調査と今回の調査区 (S : 1/25,000) .....	3
図3	調査区配置図 (S : 1/300) .....	5
図4	1区南壁面上断面 (S : 1/100) .....	6
図5	2区北・東壁面上断面 (S : 1/100) .....	7
図6	1区第1遺構面検出遺構平面図 (S : 1/200) .....	8
図7	2区第1遺構面検出遺構平面図 (S : 1/100) .....	9
図8	SK23・34土層断面図 (S : 1/40) .....	9
図9	SD29・209土層断面図 (S : 1/20, 1/40) .....	10
図10	SD210平面・土層断面図 (S : 1/80) .....	10
図11	SA30平面・柱穴土層断面図 (平面S : 1/100、断面S : 1/50) .....	11
図12	SX207西壁土層図 (S : 1/50) .....	12
図13	2区第2遺構面検出遺構平面図 (S : 1/100) .....	12
図14	2区西壁土層図 (S : 1/50) .....	13
図15	2区水田復原模式図 .....	13
図16	1区縄文土器・石器出土地点平面・立面図 (S : 任意) .....	14
図17	1区第3遺構面検出遺構平面図 (S : 1/200) .....	15
図18	SK42平面・土層断面図 (S : 1/80) .....	16
図19	SK44平面・土層断面図 (S : 1/80) .....	16
図20	SX45平面・土層断面図 (S : 1/80) .....	16
図21	1区素掘小溝A～C出土遺物実測図 (S : 1/3, 2/3) .....	18
図22	2区素掘小溝出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	19
図23	SK23出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	19
図24	SD209出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	19
図25	SA30出土遺物実測図 (S : 1/3, 2/3) .....	20
図26	SX207出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	20
図27	2区水田出土遺物 (S : 1/3) .....	21
図28	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (1) (S : 1/3) .....	21
図29	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (2) (S : 1/3) .....	22
図30	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (3) (S : 1/3) .....	23
図31	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (4) (S : 2/3, 1/2) .....	24
図32	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (5) (S : 1/2) .....	25
図33	縄文時代の包含層出土遺物実測図 (6) (S : 1/2) .....	26
図34	SK44出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	28
図35	SK46出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	28
図36	SX45出土遺物実測図 (S : 2/3) .....	28
図37	2区微高地構成出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	28
図38	2区深掘縁灰砂出土遺物実測図 (S : 1/3, 2/3) .....	29
図39	1区表土出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	29
図40	2区表土出土遺物実測図 (S : 1/3) .....	29
図41	1区南壁素掘小溝断面 (S : 1/100) .....	31
図42	周辺の地割 (S : 1/5,000) .....	32
図43	第1遺構面遺構配置略図 (S : 1/200) .....	36
図44	第2遺構面遺構配置略図 (S : 1/200) .....	37

表1	周辺遺跡一覧	4
表2	報告遺物一覧（1）	38
表3	報告遺物一覧（2）	39
表4	報告遺物一覧（3）	40
表5	検出遺構および出土遺物一覧（1）	41
表6	検出遺構および出土遺物一覧（2）	42

## 写真図版

- 図版1 上段：調査前風景（南西から） 下段：1区第1遺構面全景（北から）
- 図版2 上段：1・2区第1遺構面（南から） 下段：1区第1遺構面全景（南東から）
- 図版3 上段：素掘小溝A（北から） 下段：2区第1遺構面（西から）
- 図版4 上段：SK23 土層断面（西から） 下段：SK23 完掘状況（東から）
- 図版5 上段：SK33 完掘状況（東から） 下段：SD29 土層断面（東から）
- 図版6 上段：SD209 完掘状況（北東から） 下段：SD208 土層断面（北東から）
- 図版7 上段：SD210 完掘状況（北から） 下段：SD210 土層断面（南から）
- 図版8 上段：SD210 南壁土層断面（北から） 下段：SA30 完掘状況（南から）
- 図版9 上段：SA30B 土層断面（西から） 下段：SA30D 土層断面（西から）
- 図版10 上段：SX207 完掘状況（北から） 下段：SX207 石器出土状況（南から）
- 図版11 上段：SX207 細頸壺出土状況（東から） 下段：2区水田畦畔検出状況（南西から）
- 図版12 上段：2区水田畦畔検出状況（北東から） 下段：2区水田畦畔検出状況（南西から）
- 図版13 上段：2区水田畦畔付近土層断面（南西から） 下段：2区第2遺構面完掘状況（西から）
- 図版14 上段：2区第2遺構面完掘状況（南西から） 下段：2区北壁土層断面（1）（南から）
- 図版15 上段：2区北壁土層断面（2）（南から） 下段：2区西壁土層断面（1）（東から）
- 図版16 上段：2区西壁土層断面（2）（東から） 下段：2区下層確認深部（西から）
- 図版17 上段：縄文時代包含層遺物出土状況（1）（南西から） 下段：縄文時代包含層遺物出土状況（2）（西から）
- 図版18 上段：滋賀県式土器出土状況（南から） 下段：SK44 完掘状況（南から）
- 図版19 上段：SK44 南北方向土層断面（西から） 下段：SK44 北壁土層断面（南から）
- 図版20 上段：SK46 土層断面（西から） 下段：SX45 検出状況（東から）
- 図版21 上段：SX45 完掘状況（東から） 下段：調査終了後風景（南東から）
- 図版22 1区素掘小溝出土遺物
- 図版23 SK23、SD209、SA30 出土遺物
- 図版24 SX207、2区水田出土遺物
- 図版25 2区水田、縄文時代の包含層出土遺物
- 図版26 縄文時代の包含層出土遺物
- 図版27 縄文時代の包含層出土遺物
- 図版28 縄文時代の包含層出土遺物
- 図版29 縄文時代の包含層出土遺物
- 図版30 縄文時代の包含層出土遺物
- 図版31 SK44、SK46、SX45 出土遺物
- 図版32 2区深掘隕灰砂、1区表土出土遺物

## 1. 調査に至る経緯と調査体制

### (1) 調査に至る経緯

近年弥生時代前期水田が広範囲に見つかり、脚光を浴びていた萩之本遺跡において、平成 21 年 12 月 8 日付けで全農エネルギー株式会社よりガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて権原市教育委員会では、12 月 18 日に試掘調査を実施し、地下タンク建設予定地に設定したトレンチの地表下 40cm において遺構を確認した。この報告を受けた奈良県教育委員会では平成 22 年 1 月 21 日付けで発掘調査の実施を指示、権原市教育委員会とともに発掘調査実施にむけた協議を開始した。しかし、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、(財)元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

平成 22 年 2 月 22 日付けで奈良県教育委員会より発掘調査の依頼を受けた(財)元興寺文化財研究所は、平成 22 年 2 月 26 日、萩之本遺跡の発掘調査業務（整理・報告書作成業務を含む）に係る委託契約を全農エネルギー株式会社と締結、同年 3 月 8 日に発掘調査届出を提出のうえ、同年 3 月 11 日より現地調査を開始した。

現地調査は平成 22 年 5 月 10 日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地発掘調査から報告書作成に至る間、全農エネルギー株式会社の全面的なご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

### (2) 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・権原市教育委員会

調査主体：財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 坪井清足

事務局長 奥洞二郎（平成 22 年 8 月まで）

江島和哉（平成 22 年 9 月より）

研究部長 狹川真一

考古学研究室

室長 伊藤健司

主任研究員 佐藤亜聖

研究員 村田裕介

研究員 桃井宏和

現地作業員：有限会社ワーク

測量：有限会社アクト創研

## 2. 周辺における既往の調査と課題

萩之本遺跡は橿原市川西町に位置する。弥生時代の遺物散布地として把握されていたが、近年まで発掘調査が行われたことはなく、実態は不明であった。平成10年度の奈良県遺跡地図では調査地よりも北側が萩之本遺跡として登録されていたが、2006年に行われた京奈和道建設に伴う埋蔵文化財確認調査によって從来知られていたよりも広い範囲に遺跡が展開していることが明らかになり、遺跡範囲が調査地周辺まで拡張された（図1）。

2007年、前年度の試掘調査の成果を受けて、奈良県立橿原考古学研究所により川西町一帯の発掘調査が行われた（奈良県立橿原考古学研究所 2008）。その結果、北側の川西・根成柿遺跡では、弥生時代前期の環濠集落と考えられる大溝と遺構群が見つかっている。また、川西・根成柿遺跡の発掘調査と

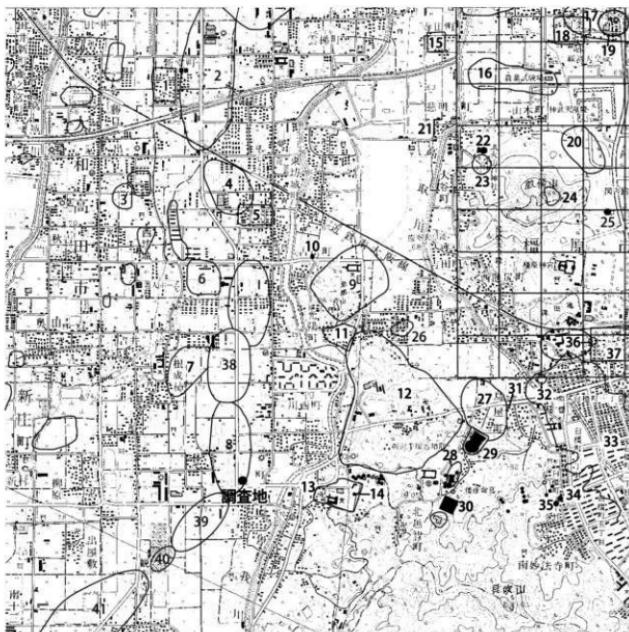


図1 調査地の位置 (S: 1/25,000)

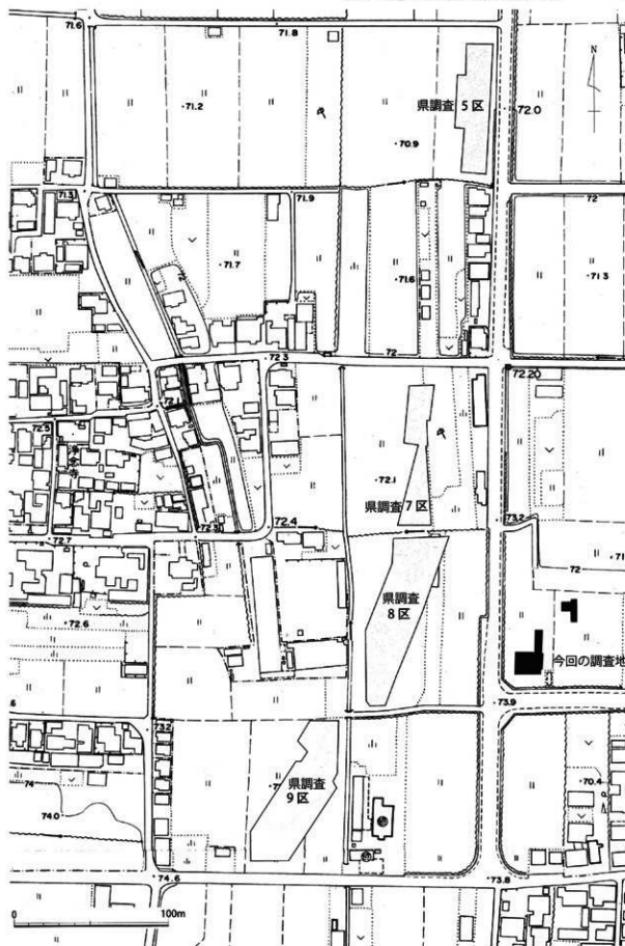


図2 既往の調査と今回の調査区 (S : 1/2,500) (奈良県立橿原考古学研究所 2008 を一部改変)

表1 周辺遺跡一覧（図1に対応）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	新堂環濠	15	寺田環濠	29	鳥屋ミサンザイ古墳
2	西新堂遺跡	16	慈明寺遺跡	30	柳山古墳
3	西坊城遺跡	17	四条遺跡	31	垣内古墳
4	東坊城遺跡	18	四条環濠	32	益田池橋管
5	東坊城環濠	19	四条古墳	33	益田池跡
6	柿の内遺跡	20	大久保遺跡	34	小谷古墳
7	宮ノ前遺跡	21	慈明寺環濠	35	小谷南古墳
8	萩之本遺跡	22	西イセン塚古墳	36	久米寺瓦窯
9	忌部山遺跡	23	慈明寺跡	37	久米寺跡
10	ワノギ古墳	24	殿傍山遺跡	38	川西・根成柿遺跡
11	光陽環濠	25	イトクノモリ古墳	39	一町西遺跡
12	新沢千塚古墳群	26	萬堀遺跡	40	觀音寺遺跡
13	長法寺城跡	27	鳥屋遺跡	41	觀音寺本馬遺跡
14	鉄砲塚古墳	28	鳥屋城跡		

連動して、同年今回の調査地の西側約100mの地点で奈良県立橿原考古学研究所により萩之本遺跡の調査（以下県調査とする）が行われた。この調査では、弥生時代前期の広範囲にわたる水田や、古墳時代の溝、平安時代前期に埋没する河道などが見つかっている。また、弥生時代水田の下層からは縄文時代後期末の遺物を含む河道などが発見されており、周辺に縄文時代集落の存在が推定された。

このような既往調査の成果を踏まえ、今回の調査に際してはまず萩之本遺跡の範囲を確認することを課題とした。さらに、県調査では弥生時代前期と推定される大規模な水田遺構が検出されており、報告書ではその地形に制約されたあり方から、「分節化した小規模な水田城が点在する様子を想定するほうが実態に近いだろう」と指摘している。調査地周辺の現状地形は比較的平坦な扇状地であるが、本来は微地形が貫入する複雑な地形であった可能性があり、こうした弥生時代前期水田の縁辺部の状況が確認できる可能性が想定された。県調査ではこうした微地形が縄文時代後期～晚期に急速な堆積を伴い安定化してゆくことが指摘されており、こうした景観変遷の画期をより具体的に解明することも今回の調査の課題である。

このほか、萩之本遺跡南端で行われた県調査9区では、平安時代に埋没する河道が検出されており、条里型地割が展開する当地域において、現状景観の施工起源を考える事も課題といえる。

### 3. 調査の成果

#### (1) 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定

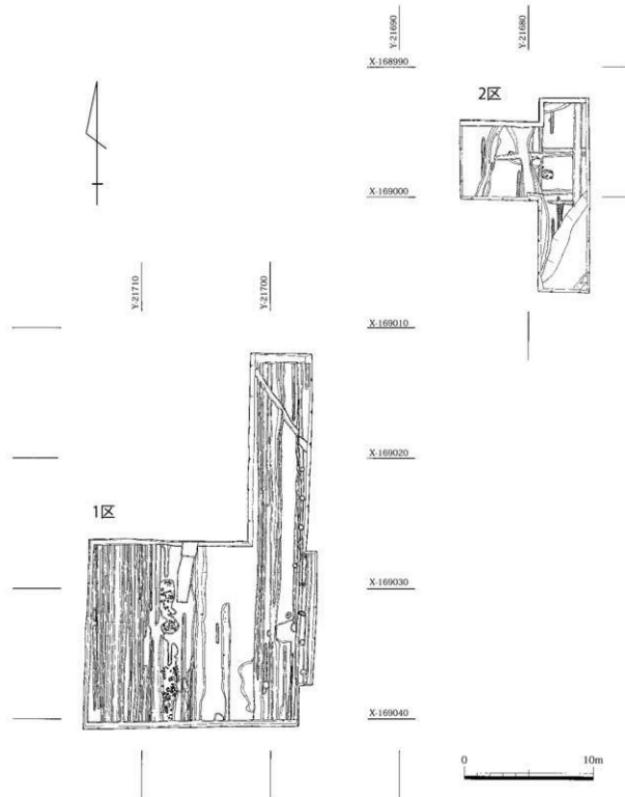


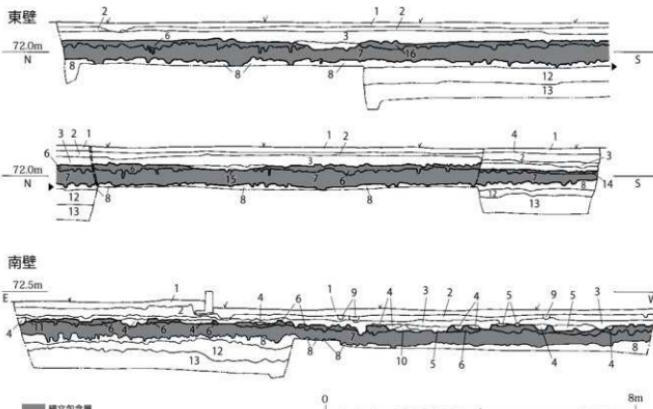
図3 調査区配置図 (S : 1/300)

調査区の配置については、開発が地下遺構に及ぶ事務所棟及び地下タンク建設予定地の二箇所に調査区を設定し、地下タンク予定地を1区、事務所棟予定地を2区とし、遺構番号は1区については1から、2区については200から付与した（図43・44）。

基本層序は層厚約15cmの現代の耕作土（4図1層）、層厚約30cmの中近世遺物包含するシルト混じり細砂層（2・3層）を除去した褐色細砂（6・7層）上面が第1遺構面である。素掘小溝、10世紀の上坑・柵列などが検出でき、遺構面の標高はおよそ72.15mである。

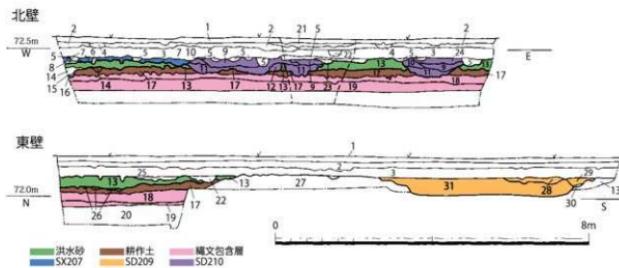
1区では、第1遺構面ベースを構成する褐色細砂およびその下部の褐色シルトが縄文時代後期半～晚期初頭の包含層で、その下面において第3遺構面を確認した。土坑、根株が検出でき、遺構面の標高は71.8m前後である（図4）。

2区では第1遺構面ベースを構成する明褐色細砂を覆土とする水田面を検出したため、これを第2遺構面とした。水田面の標高は72.10m前後である。また、水田耕作土以下には1区同様縄文時代後期の包含層が存在したが、遺構は確認できなかった（図5）。



- 1 ゾウフテ7.5YS/1 シルト混じり細砂(耕作土)  
 2 ゾウフテ7.5YS/4 シルト混じり細砂 小量的に含む  
 3 細砂層 2.5YS/1 シルト混じり細砂 小量の素掘小溝は含む  
 4 ゾウフテ7.5YS/6 シルト混じり細砂 3-5mm内の細いアラワットを含む(素掘小溝は含む)  
 5 水田 5Y4/1 シルト混じり細砂混じり細砂 稲のプロトコロ少多含む炭化物多く含む(素掘小溝は含む)  
 6 細砂層 10YS/3 シルト混じり細砂 3-5mm内の小溝を含む 鮫足着い  
 7 細砂層 2.5YS/4 中耕作土層 素掘小溝、根株が検出される  
 8 細砂層 2.5YS/4 細砂 素掘小溝が含む(SD29 壁上)  
 9 細砂層 2.5YS/4 シルト混じり細砂 素掘小溝  
 10 細砂層 2.5YS/4 10YS/1 シルト混じりシルト 素化物多く含む(SK23 壁上)  
 11 細砂層 2.5YS/4 シルト混じり細砂 素化物多く含む  
 12 にじ・痕跡 10YS/4 シルト混じり細砂 素化遺迹見られる  
 13 細砂 2.5YS/シルト 素化遺迹見られる  
 14 細砂 10YS/4/1 シルト混じり細砂 在5-6m以後の内側段の7層のブロックを含む  
 15 細砂層 10YS/4/1 中耕作土層 素掘小溝  
 16 細砂層 10YS/4/1 中耕作土層 素化物多く含む(SD29 壁上)

図4 1区南壁面土層図 (S:1/100)



- 1 オリーブ風 2.3Y3/1 シルト混じり細砂(汚泥土)
- 2 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂 小石を含む
- 3 暗灰質 2.3Y4/4 シルト混じり細砂 小石を含む
- 4 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂(汚泥土)
- 5 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂(汚泥土)
- 6 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂
- 7 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂(汚泥土)
- 8 暗灰質 2.3Y4/2 中粒砂混じり細砂 有機質多く含む腐葉地(S-207 壤土)
- 9 和 10Y4/4 粗粒土 基礎地(S202 壤土)
- 10 和 10Y4/4 粗粒土 基礎地(S202 壤土)
- 11 黄褐色 2.3Y5/4 中粒砂混じり細砂(細砂含む) 腐葉地(S202 壤土)
- 12 黄褐色 2.3Y5/4 中粒砂混じり細砂(細砂含む) 腐葉地(SD210 壤土)
- 13 黄褐色 2.3Y5/4 中粒砂混じり細砂(細砂含む) 腐葉地(S202 壁土)
- 14 黄褐色 2.3Y5/4 中粒砂混じり細砂(細砂含む) 腐葉地(S202 壁土)
- 15 相模黄 2.3Y4/2 シルト 有機物を含む腐葉地(S202 壁土)
- 16 暗灰質 10Y4/2 粗粒混じりシルト 基礎地(S202 壁土)
- 17 暗灰質 10Y3/2 砂・隕石混じるシルト ブロック状構造を有する(耕作土)
- 18 暗灰質 2.3Y4/2 中粒砂混じり細砂(汚泥土) 小石を含む
- 19 暗灰質 2.3Y4/2 中粒砂混じり細砂(汚泥土) 有機物を含む
- 20 オリーブ風 2.3Y4/4 中粒砂 暗灰質
- 21 和 10Y4/4 シルト混じり細砂
- 22 黄褐色 2.3Y4/2 中粒砂混じりシルト 有機物を含む
- 23 暗灰質 2.3Y4/2 中粒砂混じりシルト(高湿度小窓)
- 24 オリーブ風 2.3Y4/4 中粒砂 暗灰質
- 25 黄褐色 2.3Y4/4 中粒砂混じりシルト 暗灰質
- 26 にじみ黄 10Y4/3 中粒砂混じりシルト 目5~10mmの褐色土ブロック含む
- 27 17輪柱状なるもの(礁) 暗灰質を含む
- 28 黄褐色 2.3Y4/4 中粒砂混じりシルト(高湿度小窓)
- 29 和 10Y4/4 粗粒土(中粒砂含む) 壁土
- 30 和 10Y4/4 中粒砂(中粒砂含む) 壁土
- 31 オリーブ風 2.3Y4/4 シルト混じり細砂(SD209 壁土)

図5 2区北・東壁面土層図 (5:1/100)

## (2) 検出遺構

### 第1遺構面検出の遺構

素掘小溝（遺構：図6、遺物：図21-22）

調査区全面で合計36本以上の素掘溝を確認した。これらは埋土の違いから大きく3グループに分ける。いずれのグループもほぼ座標方位と同じ方位を指向する。

**素掘小溝A** 1・2区の全面に展開し、暗灰黄色のシルト混じり細砂を埋土とする。幅25~30cm、深さ15~20cmを測り、断面形態浅い「U」字形を呈するものを主とする。埋土内に水性堆積の痕跡は見られず、底部には掘削道具の刃先痕が残る。埋土内から大和L型III-1型式の土師器釜（1）が出土しており、16世紀後半を下限とする。

**素掘小溝B** 1・2区の全面に展開し、オリーブ褐色のシルト混じり細砂を埋土とする。幅15~30cm、深さ10~15cmを測り、断面形態浅い「U」字形を呈するものを主とする。埋土内に水性堆積の痕跡は見られず、底部には掘削道具の刃先痕が残る。埋土内から大和L型III-1型式土師器釜口縁部や体部（10）が出土しており、16世紀後半を下限とする。

**素掘小溝C** 1区西半のみに存在し、灰色のシルト混じり細砂を埋土とする。幅25~30cm、深さ10~15cmを測り、断面形態浅い「U」字形を呈するものを主とするが、複数の溝が重複するため正確

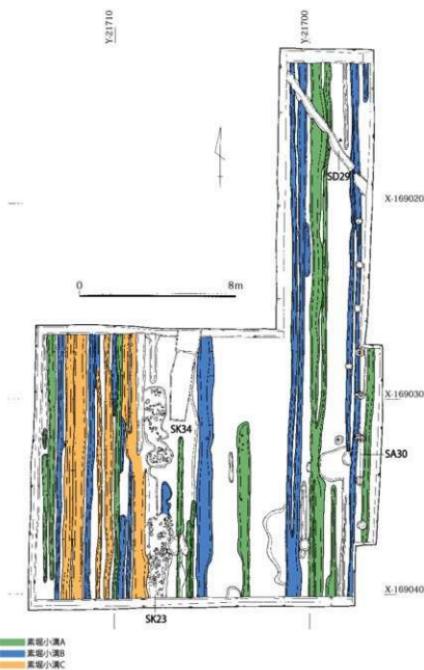


図6 1区第1遺構面検出遺構平面図 (5:1/200)

な規模は不明である。埋土内に水性堆積の痕跡は見られず、ベース上のブロックを含む。底部には摺削道具の刃先痕が残る。埋土内出土の最新遺物はIV段階の瓦器椀であり、14世紀半ばを下限とする。

#### 土坑

SK23 (遺構: 図8、遺物: 図23)

1区中央付近で検出した土坑。南北方向に主軸を持ち、SK34と南北に並ぶ。上面を削平される上に素掘小溝A～Cに破壊され、遺存状況は良くない。長軸432cm以上、短軸88cm、深さ4～16cmを測り、正確な形状は不明である。底部は起伏が激しい。埋土は2層に分かれ、いずれも砂混じりシルトを主体とする。上層は炭化物を多量に含み、人為的埋土と考えられる。埋土内より10世紀半ば～後半の土師器皿(20)、黒色土器椀(19)・皿(18)などが出土した。

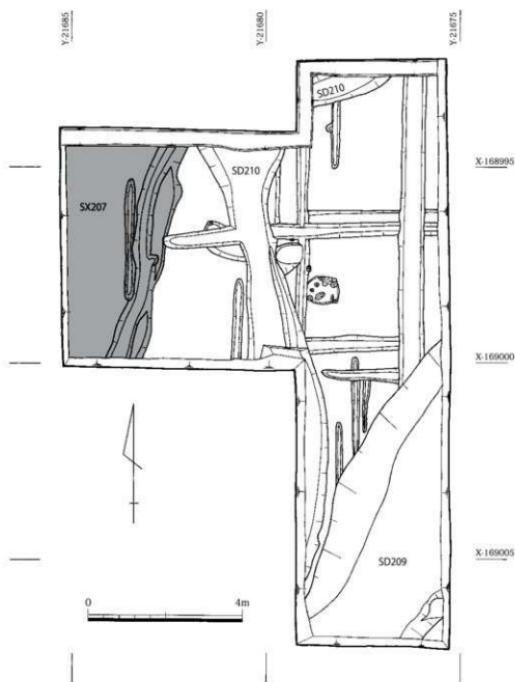


図7 2区第1造構面積換出構平面図 (5:1/100)

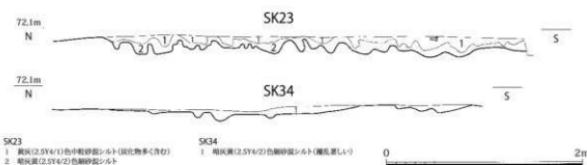


図8 SK23・34 土層断面図 (5:1/40)

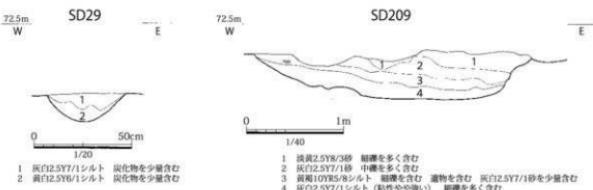


図9 SD29・209 土層断面図 (S: 1/20, 1/40)

## SK34 (遺構: 図8)

1区中央付近で検出した土坑。SK23 同様南北方向に主軸を持ち、SK23 と南北に並ぶ。上面を削平される上に素掘小溝 A ~ C に破壊され、遺存状況は良くない。長軸 403cm、短軸 60cm、深さ 4 ~ 16cm を測り、不整形な形状を呈する。埋土は砂混じりシルトの単層で、人為的理土と考えられる。埋土内より土師器の細片が出土したが、時期決定はできない。位置関係や理土の類似性から SK23 と近似する時期のものと推定する。

## 溝

## SD29 (遺構: 図9)

1区北東隅を南東から南西へ横切る溝。全ての素掘小溝に切られる。幅 40cm、深さ 15cm 前後を測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。埋土は 2 層に分かれているが、共に白色を帯びたシルト層で、炭化物を少量含み、ラミナ等は明確ではない。底部レベルは南東隅と北東隅でほとんど差がない。埋土内から遺物の出土は見られず、埋土も他遺構とは異なるため時期決定は困難である。

## SD209 (遺構: 図9、遺物: 図24)

2区南端で検出した溝。全ての素掘小溝に切られる。幅 330cm、深さ 50cm 前後を測り、断面形態逆台形を呈する。埋土は 4 層に分かれ、上層 2 層は砂、下層 2 層はシルトを主体とする。いずれの層もラミナの形成が見られ、水流の存在が窺える。検出範囲内で溝底部の傾斜方向は判断できない。埋土上層から TK47 型式に相当する須恵器杯(22)・杯蓋(21)などが出土した。

## SD210 (遺構: 図10)

2区中央部を南北に横切る溝。北側調査区端付近で分岐もしくは東へ蛇行する。全ての素掘小溝に切られ、SD209 との切りあいはない。幅 68 ~ 144cm、深さ 25cm 前後を測り、断面「U」字形を呈する。埋土は 2 層に分かれ、いずれも砂を主体

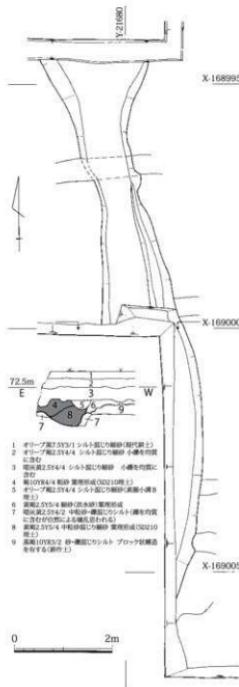


図10 SD210 平面・土層断面図 (S: 1/80)

とする。埋土の観察からは強い水流の存在が窺え、洪水による廃絶が想定されるが、後述する弥生時代前期水田を覆う洪水砂はSD210ではなく、その下に存在したと思われる溝（図10上断面図内6層）より供給されている。溝底部レベルは検出範囲では傾斜方向の判断ができない。埋土から土器細片が出土したが、年代等は決定できない。

#### 柵列

##### SA30（遺構：図11、遺物：図25）

1区東端で検出した柵列。A～Hの8基の柱穴から構成され、さらに南へ伸びるものと考えられる。柱穴は直径30～40cm、深さ20～30cmのものを主体とするが、Bは深さ41cm、Hは深さ60cmを測る。D・Hは柱痕跡が確認できるものの、その他の柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱材が残存せず、柱の形状は不明だが、Dの底部には角柱状の柱型が確認できた。柱間隔は平均224cmを測るが、C-D間は165cmと狭くなる。柵列の主軸方向は検出長1288cmでN-0° 42' 42" Wを測る。埋土内から10世紀半ば～後半の土器師、黒色土器などが出土した。

#### そのほかの遺構

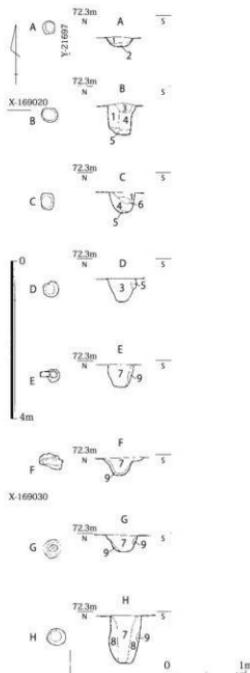
##### SX207（遺構：図12、遺物：図26）

2区西半で検出した浅い落ち込み。東端に存在したごく浅い溝から供給された粗砂が一面に広がる。粗砂はラミナを形成し、洪水によって運ばれた溢流堆積物が滞留して形成されたものと考えられる。埋土内より弥生時代中期（大和第III-1～2様式）の細頸壺（34）、鉢（35）などが出土した。

#### 第2遺構面検出の遺構

##### 水田（遺構：図13～15、遺物：図27）

2区において第1遺構面の直下から、洪水砂（図14-13層）で覆われた水田面を検出した。水田は2区西北半のみに存在する。畦畔の遺存状況は悪く、幅30～75cm、高さ5cm程度のものが1条確認できたのみである（畦畔1）。畦畔1は微高地の縁辺付近をセンターに沿って走り、微高地との境には幅90cm、深さ5～10cm程度の窪みが存在する。断面観察からは何度も掘削した痕跡が見られ、埋土には砂によるラミナが確認できることから水路として機能していたことがわかる。この水路は直接水田区画



- 1 長円 2.57m/1 ⑨ 磨を多く含む 磨物(土器)あり 白灰
- 2 黄白 2.57m/1 砂質シルト 壓縮地歴
- 3 黄灰 2.57m/1 砂質シルト(粘性やや強く) 磨を多く含む
- 4 黄灰 2.57m/1 砂質シルト(粘性やや強く)
- 5 黄灰 2.57m/1 砂質シルト(粘性やや強く)
- 6 黄灰 2.57m/1 砂質シルト(粘性やや強く)
- 7 黄褐色 10.93m/2 中砂粒混シルト(土方に砂多い)
- 8 周周白 10.93m/3 砂混にシルト 粒3～5mmの亜角礫状地
- 9 褐色 10.94m/4 シルト

図11 SA30 平面・柱穴土層断面図  
(平面S:1/100、断面S:1/50)

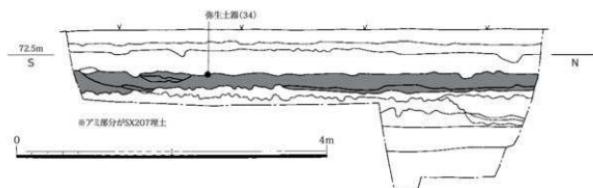


図 12 SX207 西壁土層図 (S : 1/50)

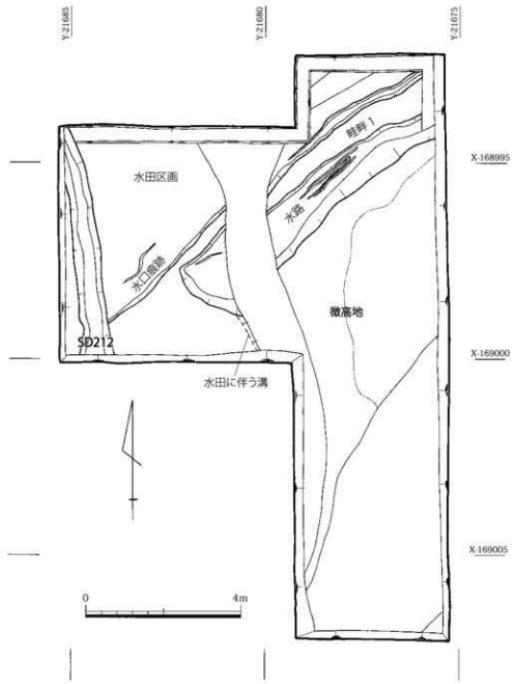
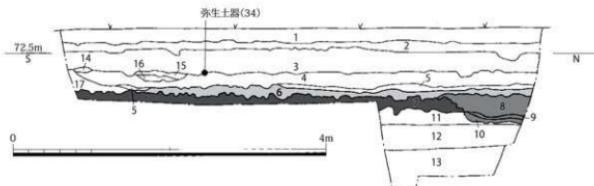


図 13 2区第2造構面接出造構平面図 (S : 1/100)



- 1 オリーブ葉 2.3YD/1 シルト混じ砂層(耕作土上)
- 2 オリーブ葉 2.3YD/1 シルト混じ砂層、小磚瓦の内に含む
- 3 明灰泥 2.3YD/4 ラム状裂け砂層、小磚瓦の内に含む
- 4 オリーブ葉 2.3YD/3 中粒砂混じ砂層、葉理形成(SX207 墓土上)
- 5 明灰泥 2.3YD/2 中粒砂混じ砂層、有機質を多く含み葉理形成(SX207 墓土上)
- 6 黒泥 2.3YD/4 砂層(耕水田)
- 7 黒泥 10YR3/2 砂-礫混じ砂層、黒色状態を有する(耕作土)
- 8 黒泥 2.3YD/3 中粒砂混じ砂層、葉理形成(SD212 墓土)
- 9 明灰泥 2.3YD/2 シルト、炭化物を含み葉理形成(SD212 墓上)
- 10 黒泥灰 10YR3/2 砂層(砂層)、葉理形成(SD212 墓上)
- 11 明灰泥 2.3YD/2 中粒砂-礫混じ砂層(黒色状態を含むが白筋による繊維と思われる)
- 12 明灰泥 2.3YD/2 シルト混じ砂層、5mm前後の砂礫を主体とする
- 13 明オーバード 3YD/4 中粒砂、葉理形成
- 14 にじく黒泥 10YR3/3 中粒砂混じ砂層、炭化分物含む
- 15 黒泥 2.3YD/4 中粒砂、葉理形成(SX207 墓土上)
- 16 黒泥 2.3YD/4 シルト混じ砂層、葉理形成(SX207 墓土上)
- 17 黒泥灰 2.3YD/4 和砂、葉理形成(SX207 墓土)

図14 2区西壁土層図 (S:1/50)

に給水する水口が存在せず、本来北東へ流れ、調査区外で別の水田区画に給水していたものと考えられる。また、畦畔1がSD212と接する付近には地山が浅く抉れた部分が存在し、内部に砂の堆積が確認できた。検出水田区画とSD212との境界付近には畦畔は確認できなかったが、本来ここには畦畔と水口が伴い、水田面はSD212から給水を受けていたものと考えられる。

洪水砂はSD210直下に存在したと考えられる溝（図10-6層）より供給されるが、SD212埋土も同様の洪水砂によって埋没し、その一部は水田耕作土を覆うことから、SD212からも洪水砂が供給されたものと考えられる。

こうした状況を元に機能時の水田を復原したものが図15である。給水はSD210直下に存在した水路からと、SD212からの2系統を考えられ、微高地上から運ばれた水は水路を通って効率的に複数の水田区画を灌漑したものと思われる。

水田の経営期間について、水路に複数回

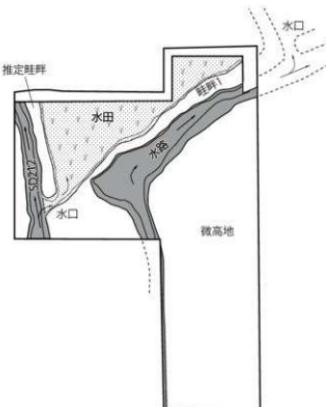


図15 2区水田復原模式図

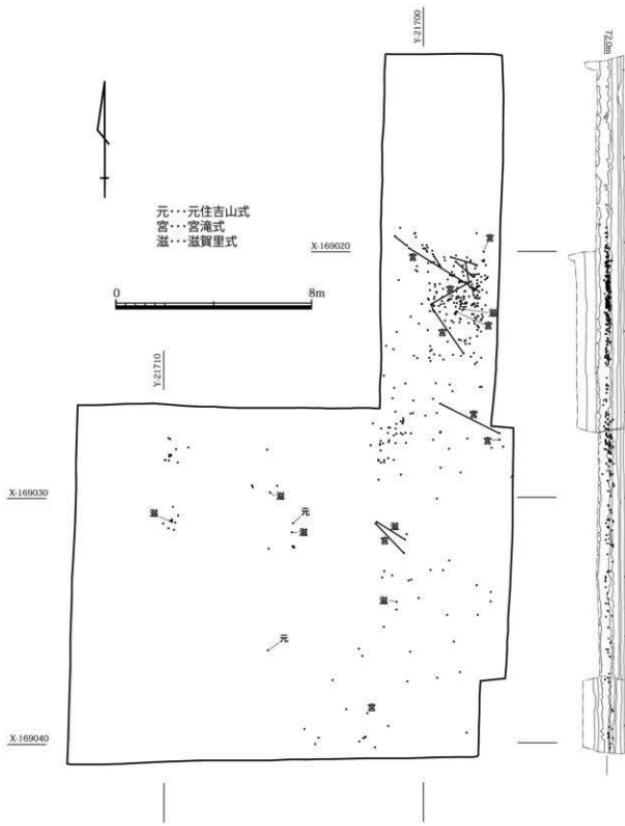


图 16 1区绳文土器・石器出土地点平面・立面图 (S:任意)

の掘り直しが認められること、SD212 沿いの鞋群が完全に破壊されており、農閑期の洪水であった可能性があることなどから、複数シーズンにわたっていたものと推定される。

水田の時期については、耕作土以下から縄文時代の土器細片が、洪水砂から弥生時代前期の蓋（37）が出土したことから、弥生時代前期に廃絶した水田の可能性が高い。

水田耕作土は本来、1 区へも広がっていた可能性が高いが、1 区では検出できなかった。

#### 縄文時代の包含層（遺構：図 16、遺物：図 28～33）

第1 遺構面調査時に複数箇所でベース土（図 4-6・7 層（網掛け部分））内に縄文土器が含まれてい

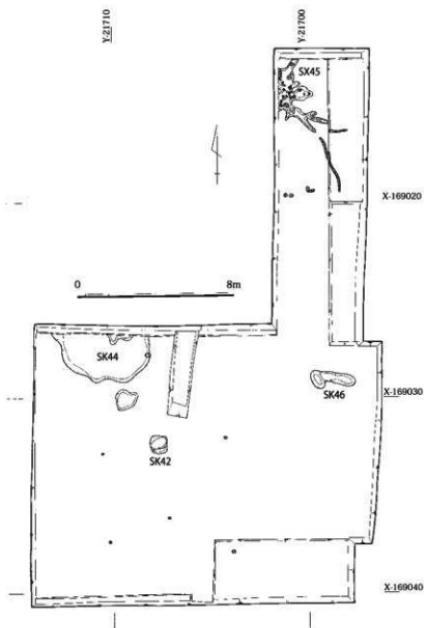


図 17 1 区第 3 遺構面検出遺構平面図 (5 : 1/200)

ることを確認したため、急速調査方針を協議のうえ、下層遺構の調査を行った。

縄文土器・石器は北側にやや集中する傾向があるものの、包含層内に広く分布し、また垂直分布を見ても上層内に均等に展開していた。掘削途中に何度も平面精査を行い遺構検出に努めたが、一切遺構を確認することができなかった。個別遺物の出土状況を詳細に見ると、土器が水平に配置される状況ではなく、石器と混じって不規則に傾く状態が多く確認でき、その後の整理においても接合できた個体が極めて少なかった。出土した土器は元住吉山式



図 18 SK42 平面・土層断面図 (S: 1/80)

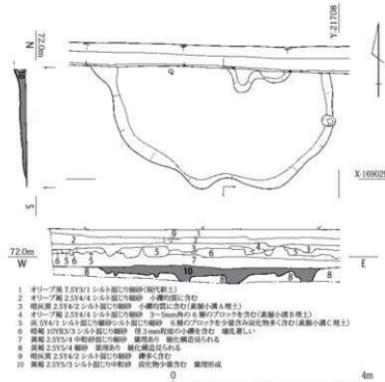


図 19 SK44 平面・土層断面図 (S: 1/80)

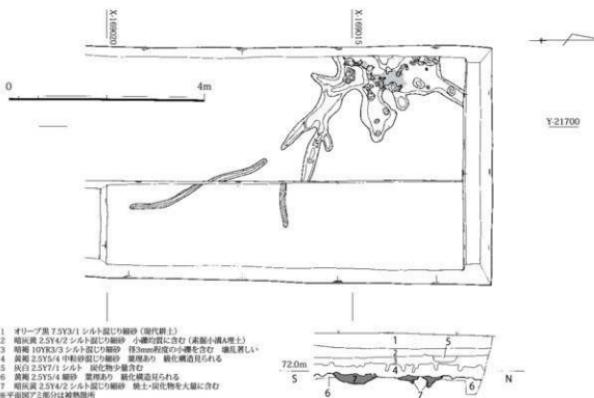


図 20 SX45 平面・土層断面図 (S: 1/80)

～滋賀里Ⅱ式までの幅を持っており、型式が判別できる遺物について、型式別の出土地点を確認すると別型式の土器が混在して分布していることが看取できた（図16）。さらに遺物の接合関係をみると、接合可能な遺物は南東・東北方向の接合関係を持つものがほとんどである。これらに加え、縄文土器・石器が出土した土層は黄褐色を呈する中粒砂混じり細砂で、部分的にラミナや級化構造が確認できる。

これらのことから、この包含層は元住吉山式～滋賀里Ⅱ式までの遺物を含んで南東方向から流れ込んだ洪流水堆積層である可能性が極めて高い。しかしながら遺物の観察からは長距離を流れたような摩滅はほとんど観察できず、これらの遺物の元位置は調査地からそれほど離れていない場所であったと考えられる。今後周辺での調査、特に南東方向での発掘調査に際しては、縄文時代後期～晩期集落の存在に留意する必要があるろう。

なお、この包含層は2区において弥生時代水田のベースとなっている細砂層と同一の遺構と考えられるが、2区では出土遺物は極めて少なかった。

### 第3 遺構面検出の遺構

縄文時代の包含層を除去した黄褐色細砂（図4-8層）上面において、土坑や根株を検出した。

土坑

SK42（遺構：図18）

1区中央付近で検出した土坑。一边80cm、深さ5～22cmを測る隅丸方形を呈し、南に段を持つ。底部はやや起伏を有する。埋土はシルト混じり細砂の単純層で、シルトブロックを含み人為的埋土の可能性が高い。埋土内から遺物の出土は見られない。

SK44（遺構：図19、遺物：図34）

1区中央北端で検出した土坑。大半は調査区外である。東西490cm、深さ19～30cmを測り、底部は著しく起伏を持つ。埋土は上層の包含層に類似するシルト混じり中粒砂であり、炭化物を含む。埋土にはラミナも見られ自然堆積層と考えられる。形状、埋土から倒木痕も含めた自然地形の可能性が高い。埋土下層から宮滝式土器深鉢が出土した。

SK46（遺物：図35）

1区東端で検出した土坑。長軸230cm、短軸50cm、深さ5～9cmを測る不整形な土坑。埋土にはラミナも見られ自然堆積層と考えられる。形状、埋土から自然地形の可能性が高い。

根株

SX45（遺構：図20、遺物：図36）

1区北端で検出した根株である。6m近く根を張る大型の樹木であるが、幹は根に至るまで被熱しており、木質部分は完全に炭化していた。炭化した木質部分の隙間よりサヌカイト剝片が出土しており、人為的な焼却と根株の抜き取りが行われた可能性もある。当研究所研究員木沢直子による炭化材の樹種鑑定によって、樹種はアカガシ亜属であったことが判明した。

### （3）出土遺物

#### 第1 遺構面検出遺構出土遺物

1区素掘小溝A出土遺物（図21）

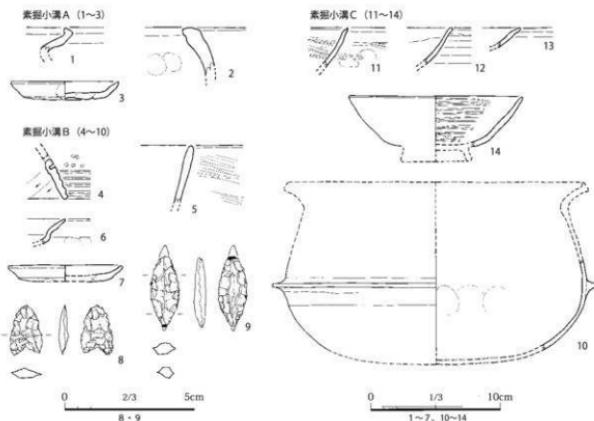


図21 1区素掘小溝A~C出土遺物実測図 (S: 1/3, 2/3)

**土師器釜(1・2)** 1は大和I型の口縁部である。強く開き口縁端部を上方へ引き上げる。内外面ナデ調整を行い、外面には煤の付着が見られる。III-I型式に相当し、16世紀後半のものである。2は大和H型の口縁部である。口縁端部の巻き込みはナデにより潰れ、体部外面には板ナデの痕跡が見られる。胎土は砂粒を多く含み、断面は黒灰色を呈する。13世紀のものと考えられる。

**土師器皿(3)** 手づくねで成形し、口縁部をナデ調整する。胎土は橙褐色でクサリ礫と雲母を多く含む。13世紀後半のものと考えられる。

#### 1区素掘小溝B出土遺物 (図21)

**弥生土器(4)** 高杯の脚部である。内面ケズリ調整を行い、外面には4条凹線と円錐工具による刺突を行う。刺突は貫通しないものも認められる。胎土は褐色で砂粒を多く含む。弥生時代中期後半のものと考えられる。

**繩文土器深鉢(5)** 内面ナデ調整、外面左上がりのヘラミガキを行う。胎土は暗褐色で長石・角閃石・雲母を多量に含む。繩文時代後期末のものと考えられる。

**土師器皿(6・7)** ともに手づくね成形である。6はやや強く開く口縁部を持ち、口縁部の強いナデにより底部との境に稜ができる。胎土は橙褐色でクサリ礫を多く含む。13世紀後半のものである。7は体部ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は橙褐色で雲母を多く含む。13世紀後半のものと考えられる。

**石鐵(8・9)** 8はサヌカイト製で凹基無茎鐵のものである。側面中位附近に両側からわざかに抉りを入れる。重量0.6gを測る。9はサヌカイト製で柳葉形鐵のものである。先端部と基部をわざかに欠損する。欠損部は風化が確認でき、新欠ではない。重量は1.3gを測る。

土師器釜（10） 体部の破片である。薄手で下膨れの形態を持ち、鋸は短い。内外面ナデ調整を行い、体部外面鋸以下には煤の付着が見られる。胎土は褐色で精良である。大和I型III-1型式のものと考えられ、16世紀後半のものである。

#### 1区素掘小溝C出土遺物（図21）

瓦器楕（11） 内外面へラミガキを行い、外面はユビオサエの痕跡が顕著である。イブシは剥落し、胎土は褐色を呈する。Ⅲ段階A型式のもので、12世紀後半のものである。

灰釉陶器楕（12） 内外面回転ナデ調整を施し、内外口縁部のみ灰釉が残る。胎土は灰白色で軟質である。O53型式以降のもので、10世紀のものである。

土師器皿（13） 手づくね成形で、口縁端部を外反させ口縁部内面に面を持たせる。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で砂粒を多く含む。南都Ⅲ期のもので、10世紀半ば～後半のものである。

黒色土器A類楕（14） 内外面ナデ調整の後、内面のみへラミガキを施す。内面のへラミガキは隙間が観察できる。胎土は橙褐色でケサリ礫を多く含む。南都Ⅲ期のもので、10世紀半ば～後半のものである。

#### 2区素掘小溝出土遺物（図22）

土師器皿（15） 手づくねで成形し、口縁部をナデ調整する。胎土は淡褐色で雲母を少量含む。13世紀のものと考えられる。

瓦器楕（16・17） 16は薄手で表面の劣化が著しく、調整等は不明である。Ⅲ段階B～C型式のもので、13世紀前半～半ばのものである。 17は体部の起伏が比較的少なく、内外面にへラミガキを施す。Ⅲ段階A型式のもので、12世紀後半のものである。

#### SK23出土遺物（図23）

黒色土器（18・19） 18はA類皿である。口縁端部を外反させ、口縁部内面に面を持たせる。外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は淡褐色で精良である。 19はA類楕である。厚手の高台を持ち、内面は見込み部まで密にへラミガキを施すが、外面は表面劣化のため調整等は不明である。胎土は橙褐色でケサリ礫を大量に含む。

土師器皿（20） 体部ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。口縁端部はわずかに玉筋状に仕上げる。胎土は淡褐色で砂粒をやや多く含む。

これらの遺物は南都Ⅲ期に該当し、10世紀半ば～後半頃のものと考えられる。

#### SD209出土遺物（図24）

須恵器杯蓋（21） 内外面回転ナデ調整を行い、口縁端部には段を持つ。胎土は灰色で長石粒を含む。

須恵器杯身（22） 内外面回転ナデ調整を施し、受部は直立気味に立ち上がる。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

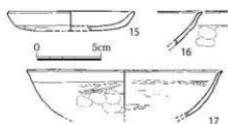


図22 2区素掘小溝出土遺物実測図 (S : 1/3)

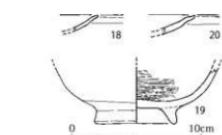


図23 SK23出土遺物実測図 (S : 1/3)

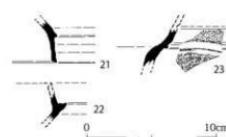


図24 SD209出土遺物実測図 (S : 1/3)

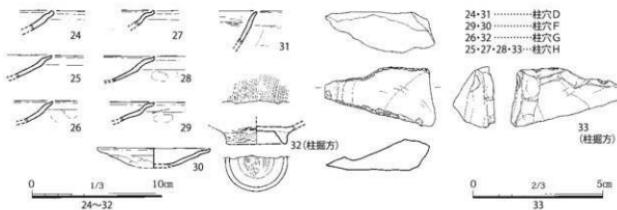


図25 SA30出土遺物実測図 (S:1/3, 2/3) (出土層位の記載がないものは柱抜き取り痕からの出土)

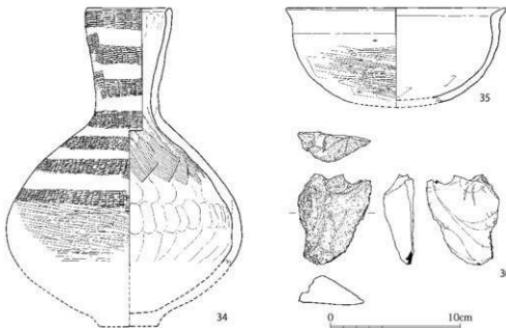


図26 SX207出土遺物実測図 (S:1/3)

須恵器甌(23) 内外面回転ナデ調整を施した後、外面突帯を挟んだ上下に細かい波状文を刻む。胎土は淡灰色を呈し精良である。

これらの遺物はTK47型式に相当する。

#### SA30出土遺物(図25)

土師器皿(24~30) すべて手づくね成形である。24は体部ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。口縁端部はわずかに玉縁状に仕上げる。胎土は淡褐色で雲母をわずかに含む。25は口縁端部を外反させ口縁部内面に面を持たせる。外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は淡褐色で精良である。26は口縁端部を外反させ、口縁端部をわずかに玉縁に仕上げる。外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は淡褐色で砂粒を多く含む。28・29はともに口縁端部を外反させ、口縁部をわずかに玉縁に仕上げる。外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は両者とも淡褐色で精良である。30は口縁端部を外反させ、口縁部をわずかに

玉縁に仕上げる。外面ユビオサエの後、口縁部をナデ調整する。胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。

黒色土器楕（31・32）31はA類楕である。口縁端部をわずかに外反させ、内面には密なヘラミガキを施す。外面はナデ調整で仕上げ、ヘラミガキは確認できない。胎土は橙褐色で雲母を多量に含む。

32はB類楕底部である。内外面ナデ調整の後、密なヘラミガキを施し、外面は高台内までヘラミガキが及ぶ。胎土は精良である。

石器（33）2次加工のある石英である。重量12.5gを測り、稜線各部に微細な剥離が認められる。火打石の可能性もあるが断定できない。

これらの遺物は南都Ⅲ期に該当し、10世紀半ば～後半頃のものと考えられる。

#### SK207 出土遺物（図26）

弥生土器細頭壺（34）丸みを持った体部とわずかに膨らみを持つ口縁部を有する。口縁端部はわずかに内傾させる。体部外面ナデ調整の後、7段の簾状文を施し、体部下半を横方向にヘラミガキする。内面は体部と頸部の接合部付近に粗いハケ痕跡が残る以外はナデ調整である。胎土は褐色で砂粒を多く含み、胴部には黒斑を持つ。

弥生土器鉢（35）外反口縁鉢である。内面ナデ調整、外面ヘラケグリの後横方向のヘラミガキを施す。外面全面に黒斑を有する。胎土は褐色で長石を主体とした砂粒を大量に含む。

石器（36）礫面を持つ剥片である。サヌカイト製で重量72.5gを測る。2次加工などは見られない。これらの遺物は大和第III-1～2様式に該当する。

### 第2遺構面検出遭墳出土遺物

#### 水田遺構出土遺物（図27）

##### 【洪水砂】

弥生土器蓋（37）壺蓋である。ユビオサエとナデにより成形・調整し、粗製である。ヘラミガキなどは見られない。胎土は淡褐色で砂粒をやや多く含む。大和第I様式のものである。

繩文土器深鉢（38）口縁部直下に屈曲を持つ。屈曲部以下には条痕が確認できる。胎土は暗褐色で砂

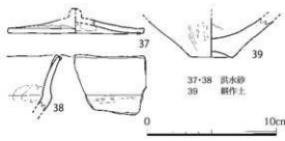


図27 2区水田出土遺物（S:1/3）

##### 1区繩シルト



図28 繩文時代の包含層出土遺物実測図（1）（S:1/3）

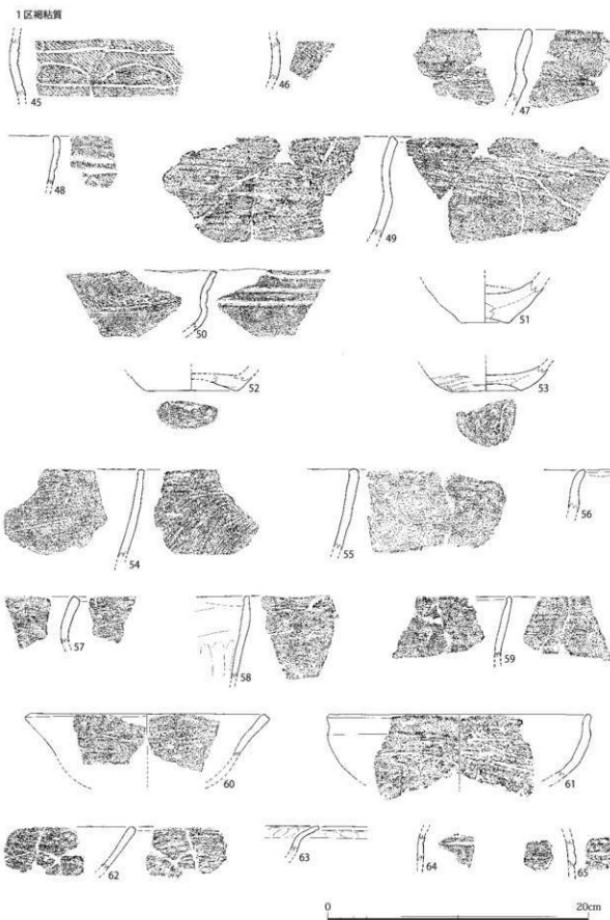


図29 繩文時代の包含層出土遺物実測図（2）(S:1/3)

## 1 図柄粘質

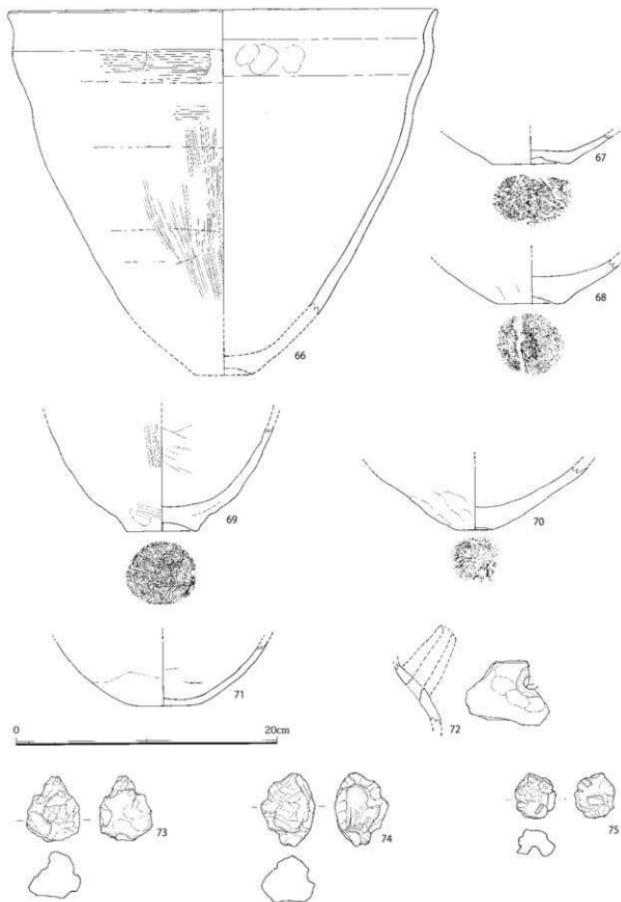
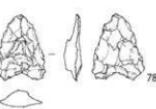
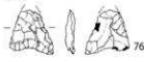


図 30 繩文時代の包含層出土遺物実測図（3）(S: 1/3)

## 1区複合質



0 2/3 5cm  
76~78, 80~82

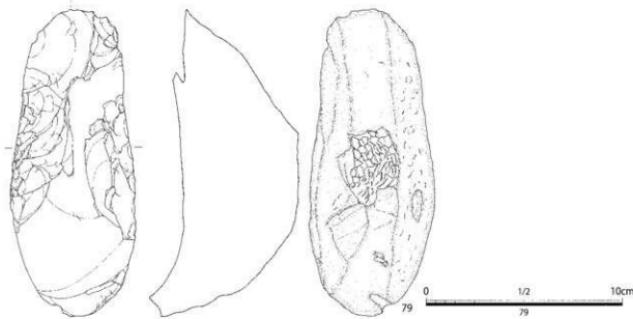
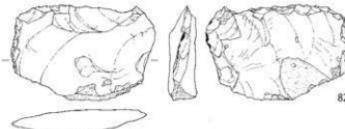
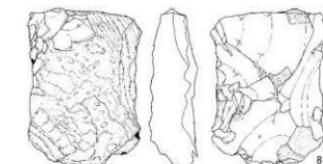
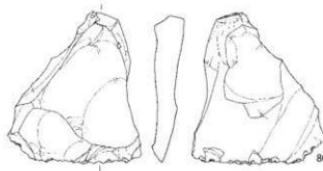


図 31 縄文時代の包含層出土遺物実測図 (4) (5 : 2/3, 1/2)

1区発見物

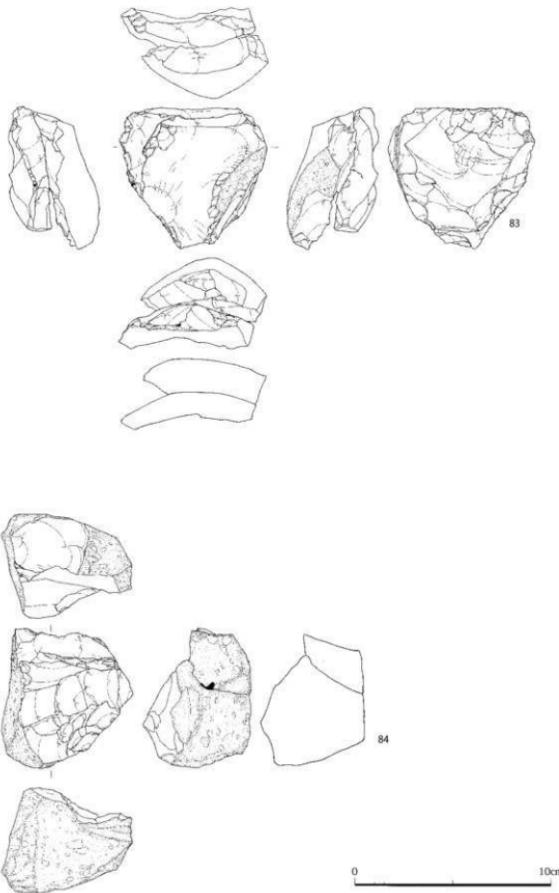


図32 編文時代の包含層出土遺物実測図(5)(S:1/2)

1区複粘質

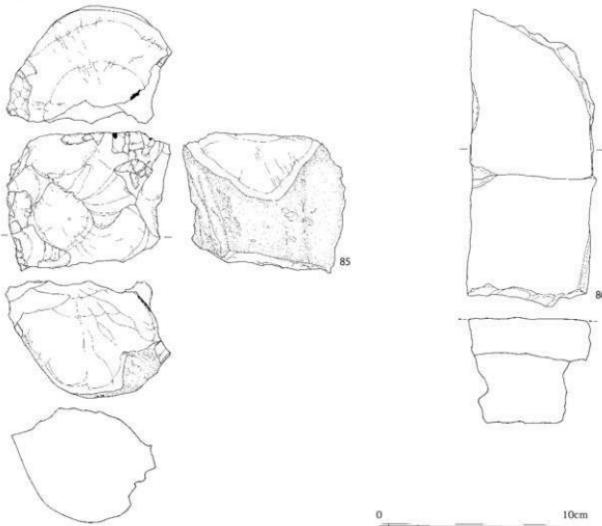


図33 繩文時代の包含層出土遺物実測図（6）(S:1/2)

粒と雲母を大量に含む。宮流式のものと考えられる。

#### 【耕作土】

縄文土器深鉢（39） 内面ナデ調整、外面縦方向の条痕を施す。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。滋賀式のものである。

#### 縄文時代の包含層出土遺物（図28～33）

縄文土器（40～72） 40は深鉢の口縁である。外面2枚貝条痕、内面ナデ調整を行う。胎土は暗褐色で角閃石を多く含む。 41は波状口縁の深鉢である。内面条痕調整、外面ナデ調整を行う。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。 42は深鉢口縁部である。内外面条痕調整を施し、胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。宮流式のものである。 43は浅鉢の口縁部である。口縁端部は小さく上方に引き出す。内外面条痕調整を施し、胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。 44は深鉢の口縁部である。外面表面劣化のため調整等は不明であるが、屈曲部に1条の凹線がめぐる。内面には条痕調

整を施す。宮滝式のものである。45は深鉢体部である。2条凹線間に縦文を施した後、弧状凹線を引き弧の内側の縦文を擦消す。胎土は暗褐色で砂粒を多量に含む。元住吉山式のものである。46は器種不明である。内面ナデ調整、外面に縦文を施す。縦の燃りは46より大きい。47は深鉢の口縁部である。内面条痕調整、外面ナデ調整を施す。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。宮滝式のものである。48は深鉢の口縁部である。口縁直下に2条の凹線がめぐる。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で砂粒を少量含む。49は深鉢の口縁部である。口縁部直下に屈曲を持ち、口縁端部は外傾して若干肥厚する。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。宮滝式のものである。50は浅鉢である。屈曲部外面に3条の凹線を施す。凹線断面は丸みを持つ。内面条痕調整、外面ナデ調整の後研磨を施す。胎土は暗褐色で角閃石を多量に含む。宮滝式のものである。51は深鉢の底部である。内外面ナデ調整を施し、胎土は褐色で砂粒を多量に含む。宮滝式のものである。52は深鉢の底部である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で砂粒を多量に含む。宮滝式のものである。53は深鉢の底部である。内面ナデ、外面左上がりの条痕調整を施し、胎土は明褐色で砂粒と雲母を多量に含む。宮滝式のものである。54は深鉢の口縁部である。内面横方向の条痕、外面右上がりの後横方向の条痕調整を施す。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。55は深鉢の口縁部である。内面ナデ調整、外面条痕調整を施す。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。56は深鉢の口縁部である。内面ナデ調整、外面は表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。57は深鉢の口縁部である。内面横方向の条痕、外面右上がりの条痕調整を施す。胎土は淡褐色で長石粒と雲母を多量に含む。宮滝式のものである。58は深鉢の口縁部である。内外面横方向の条痕調整を施し、口縁端部は粗雑に仕上げる。胎土は淡褐色で長石粒と雲母を多量に含む。59は深鉢の口縁部である。波状口縁の可能性が高い。内外面横方向の条痕調整を施す。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。60は小型の浅鉢である。外面ナデ調整、内面条痕の後ナデ調整を施す。外面面被熱痕が認められる。61は浅鉢である。内外面条痕調整の後、口縁部をナデ調整する。胎土は褐色で長石粒を雲母を大量に含む。宮滝式のものである。62は浅鉢の口縁部である。内外面条痕調整の後、内面を調整する。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含み、外面には焼が付着する。元住吉山式～宮滝式のものである。63は小型の浅鉢である。内外面ナデ調整を施し、口縁端部の処理は粗雑である。64は深鉢の体部である。屈曲部に2条以上の凹線を持つ。凹線はヘラ状工具により刻まれ、断面形態は「V」字状を呈する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は暗褐色で長石粒を少量含む。滋賀里式のものである。65は深鉢の体部である。外面に3条以上の凹線を持つ。凹線断面形態は丸みを持つ。内面ナデ調整を施し、外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は暗褐色で長石粒を多量に含む。滋賀里式のものである。66は深鉢である。体部の屈曲は弱く、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面縱方向の条痕の後、口縁直下を横方向に条痕調整する。内面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で長石粒と雲母を多量に含む。滋賀里I式のものである。67は深鉢の底部である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で砂粒を多量に含む。滋賀里式のものである。68は深鉢の底部である。内面ナデ調整、外面表面劣化のため調整等は不明である。内面には炭化物の付着が認められる。胎土は淡褐色で砂粒を多量に含む。滋賀里式のものである。69は深鉢の底部である。体部内面を条痕調整、底部内面をナデ調整し、外面は縱方向の条痕調整を行う。胎土は暗褐色で砂粒を多量に含む。宮滝式のものである。70は深鉢の底部である。内外面ナデ調整を行い、底部径は非常に小さい。胎土は褐色で砂粒を多量に含む。滋賀里式のものである。71は丸底状を呈する深鉢の底部である。内面ナデ調整、外面条痕の後ナデ調整を施す。胎土は褐色で砂粒を多

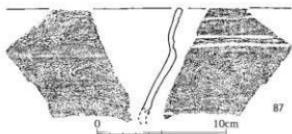


図34 SK44出土物実測図 (5:1/3)



図35 SK46出土物実測図 (5:1/3)

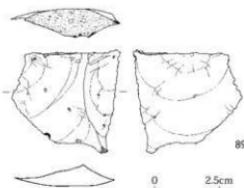


図36 SX45出土物実測図 (5:2/3)

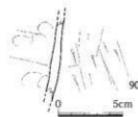


図37 2区微高地模成土出土物実測図 (5:1/3)

量に含む。滋賀里式のものである。72は注口土器である。内外面ナデ調整を施し、胎土は褐色で長石と雲母を多量に含む。外面全体に被熱痕が見られる。

焼土塊(73~75)いずれも粘土を握りつぶした形状を呈する。胎土は宮滝式土器に類似し、長石粒と雲母を含む。73は黒斑を有し、クサリ繩の比率が多く、75は雲母が少ない。

石礫(76~78)いずれもサヌカイト製で四基式のものである。76は先端を欠損し、重量0.7gを測る。77は基部付近に剥離し切れなかった厚みを残す。重量0.7gを測る。78はやや大きく厚手である。中央付近には剥離し切れなかった厚みを残す。重量2gを測る。

石核(79・85)大型のサヌカイト円盤である。同一母岩の可能性が高い。いずれも剥離面に打点が確認できず、同時に双方から破断していることから、熱破碎盤と考えられる。79は側面に複数回にわたる打撃痕がみられ、もともと敲石として使用されていた可能性が高い。重量は79が750g、85が420gを測る。

擦器(80)サヌカイト製である。頂部に一部自然面を残す。重量57.6gを測る。

剥片(81・82)いずれもサヌカイト製である。81は自然面を多く残し、第1剥離の後、両側から剥離を行ったところで剥離を停止している。重量31gを測る。82は2次加工のある剥片である。自然面を多く残し、側縁部に微細剥離を多く残す。重量23.6gを測る。

接合資料(83・84)サヌカイトの接合資料である。いずれも剥片の接合資料で、母材は別個体である。重量は83が220g、84が250gを測る。

不明石材(86)結晶片岩石である。加工の痕跡などは見られないが、石棒などの原材料として搬入された可能性が高い。今回の調査では小剥片も含め結晶片岩は他に出土していない。

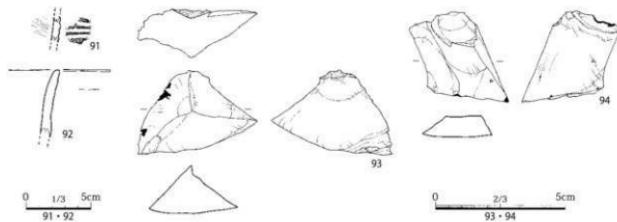


図38 2区深掘縄灰砂出土遺物実測図 (S:1/3, 2/3)

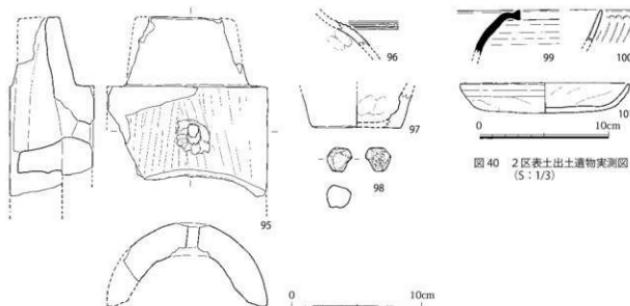


図40 2区表土出土遺物実測図 (S:1/3)

図39 1区表土出土遺物実測図 (S:1/3)

### 第3遺構面検出遺構出土遺物

#### SK44 出土遺物 (図34)

縄文土器深鉢 (87) 2段に屈曲する深鉢と考えられる。口縁部直下と屈曲部にそれぞれ凹線を有する。凹線は斜め上方からヘラ状工具により刻まれる。内外面横方向の条痕調整を施す。胎土は暗褐色で角閃石を多く含む。宮流式のものと考えられる。

#### SK46 出土遺物 (図35)

縄文土器深鉢 (88) 器種不明の口縁部破片である。内外面横方向の条痕調整を施し、外面には1条の凹線がめぐる。凹線はヘラ状工具によって刻まれ、断面形態「V」字形を呈する。胎土は暗褐色で微細な砂粒を多く含む。

#### SX45 出土遺物 (図36)

剥片 (89) サヌカイト製である。打点付近に自然面を残し、微細剥離などは見られない。白色の結晶を多く含み、上層で出土した石器群に同質の石材は見られない。重量 11.3g を測る。

### その他の出土遺物

#### 2区微高地構成土出土遺物（図 37）

縄文土器深鉢（90） 2区第2造構面の微高地を構成している暗褐色土（図 5-27 層）より出土した深鉢である。出土した 27 層は 1 区縄文時代包含層に対応する。内面ユビオサエの後ナデ調整、外面縱方向のケズリを施す。胎土は褐色で長石粒を多量に含む。内面には炭化物の付着が見られる。

#### 2区深掘り縄灰砂土出土遺物（図 38）

2区北端で行った深掘りの際、図 5-19 層から出土した遺物である。

縄文土器深鉢（91・92） 91 は 3 条凹線を持つ体部の破片である。内外面ナデ調整を施し、凹線の断面は丸い。胎土は暗褐色で精良である。92 は口縁部の破片である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色でチャートを主体とした砂粒を多量に含む。

石器（93・94） いずれもサヌカイトの剥片である。93 は白色の結晶を少量含み、一部に自然面が残る。重量 15.1g を測る。94 は節理の著しい石材である。重量 9.4g を測る。

#### 1区表土出土遺物（図 39）

丸瓦（95） 玉縁式の丸瓦である。外面ナデ調整、内面布目が残る。内面にすべり止めの仕切りを設け、焼成後穿孔を行なう。胎土は灰色で砂粒と黑色粒子を含む。室町時代のものである。

弥生土器（96・97） 96 は壺の肩部である。内外面表面劣化のため調整等は不明であるが、外面には半裁竹管による 2 条沈線を施す。胎土は淡褐色で微細な砂粒を含む。弥生時代前期のものと考えられる。97 は壺底部である。直立する体部を有し、内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で長石粒を多量に含む。

土製円板（98） 瓦を削ったものと考えられる。重量 1.8g を測る。

#### 2区表土出土遺物（図 40）

須恵器壺（99） 広口壺の口縁部である。内外面回転ナデ調整を施し、胎土は灰白色で精良である。奈良時代のものである。

青磁碗（100） 内面厚く釉がかかり、外面には細蓮弁を刻む。胎土は白色で精良である。龍泉窯のもので、16 世紀前半のものである。

土師器皿（101） 手づくねで成形し、口縁部を 2 段ナデ調整する。胎土は橙褐色で長石粒と雲母を多く含む。13 世紀前半～半ばのものと考えられる。

## 4. 調査のまとめ

### (1) 縄文時代後期～弥生時代前期の萩之本遺跡

縄文時代の萩之本遺跡については、明確な生活遺構が見られない。第2遺構面SK44・SK45はいずれも倒木痕や根株など自然痕跡と思われる。SK45はアカガシ亜属のもので、当時の植生を窺うことができるほか、SK44からは縄文時代後期後半の宮滝式土器が出土しており、これらの遺構が当該期のものであることを物語る。

周辺における縄文時代の動向をみると、萩之本遺跡の南西に所在する觀音寺本馬遺跡において、明確な遺構が伴わないものの、縄文時代前期(北白川下層式)の土器が出土している。同遺跡では後期初頭(中津式)の石壙炉も見つかっており、この頃が明確な遺構の初現である(岡田雅彦2009)。調査地周辺がもっと活性化するのは縄文時代晩期中葉であり、後期～晩期前葉の遺跡は少ない。

遺構は不明であるが遺物が見つかっている事例として、今回の調査地の東約1kmに位置する鳥屋遺跡、その北西0.5kmに位置する箸喰遺跡では元住吉山式の遺物が出土している(小島1965)。さらに北側500m地点で行われた県調査4区においては、縄文時代後期後半(元住吉山式～滋賀里I式)、晩期全般(滋賀里II式～船橋式)の遺物が河原から出土している(鈴木・平松2008)。この調査では遺物に使用痕が明確に残ることから、調査区西側に存在した集落より遺物がもたらされた可能性が指摘されている。今回調査で検出した縄文土器類は14頁において分析したように、南東方向近隣よりもたらされたと推定しているので、県調査4区で検出した縄文土器とは別の集落に由来することになる。

こうした当該期の動向を整理すると、縄文時代後期後半～晩期初頭には小規模散発的な遺物出土地が、おおむね500m程度の間隔で存在している。鳥屋遺跡・箸喰遺跡の実態が不明であるが、いずれの地点も遺物の出土量は少なく、拠点的な集落を形成していたようには見えない。これが「回帰的居住」<sup>(1)</sup>も含めた居住形態の流動性によるものなのか、小規模定住によるもののかはなお検討が必要であるが、少なくとも当該期集落の小規模性は指摘できそうである。

### (2) 素掘小溝にみる土地利用

今回の調査ではA～Cの3群の素掘小溝を検出した。これらはそれぞれA・B群:16世紀後半、C群:14世紀半ばの年代が与えられている。調査前の1区は中央を南北に区切るコンクリート畦畔を境に東半と西半で20cm程度の高低差を有していた。素掘小溝Bの溝底部レベルを比較すると、1区西半のものが標高72.02m前後であるのに対し、東半のものは72.16～72.18mと約15cm前後の高低差が観察できる。このことは素掘小溝Aではさらに顕著である。

さて、ここで問題となるのは素掘小溝Cである。この溝は1区西半のみにしか存在せず、また溝底部

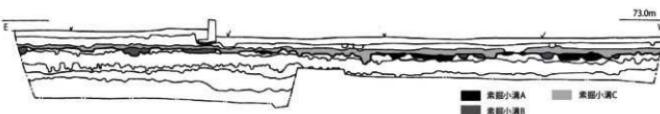


図41 1区南壁素掘小溝断面 (5:1/100)



図42 周辺の地割 (S: 1/5,000) (『大和国里復原図』より)

レベルもほぼ描うことから、1区西半が14世紀には平坦化しており耕地として利用されていたこと、現在と同じコンクリート駐車場周辺から土地利用が変化していたことが窺える。ただし東半に素掘小溝Cが存在しないのが削平された結果であるのか、そもそも水田として利用していなかったのかについては不明といわざるを得ない。

以上、ミクロな視点での現状景観の成立時期について検討した結果、遅くとも14世紀半ばには坪内の地割までほぼ現在と同じ形態が完成していたと見られる。

現在のところ、鎌倉時代以前の土地利用についての情報は乏しい。唯一参考となるのは10世紀前半

～半ばに位置づけられる SA30 の存在である。これは現在の条里方向にほぼ一致する方位を有し、また、廃棄土坑と考えられる SK23・34 の西端からの距離は 11.0m を測る。この距離は長地型条里地割の一反幅にほぼ一致する。断片的な情報であるが、当地の開発二期となった可能性も考えられる。

ところで、県調査9区では平安時代に機能していた河川が見つかっている。周辺にはこの旧河道に合致する地割が部分的に見られるが、「下ノ池」「上ノ池」という小字名のある部分以外はすべて条里型水田となっている。小字名をたどると北に「濁坪」「堤口」、南に「下久保田」「中久保田」「上久保田」など旧河道をうかがわせる字名が続き、これを追うことでの本の河道のラインを復原することができる。「下ノ池」「上ノ池」という字名はこうした旧河道の一部を池として利用したことを示すと思われる。そしてそれ以外の河は条里型水田化し、まったく痕跡を残さない。このことは少なくとも周辺地域の条里型水田の開発が旧河道の埋没以降であることを推定させる。今回の調査で検出した平安時代柵列・土坑は、こうした大規模開発の一端を示す可能性がある。もちろんこのことが制度としての条里制成立時期を示すわけではないが、地割そのものの成立時期の一端を示すものであろう。

### (3) 今後の課題

さて、最後に今回の調査を通じて見る今後の課題について整理し、本書の責を果たしたい。

まず、縄文時代集落についてである。今回の調査では包含層の遺物の接合状況、型式の混在性、土層の観察から、東南方向隣接地に集落の存在を想定したが、先にも述べたとおりこの時期の集落は非常に小規模なものが散在する形態であると思われ、特に試掘調査などの場合は明確な遺構を検出できない可能性が高い。遺物の有無などに注意して丁寧な検査が求められよう。

次に、弥生時代前期水田についてであるが、今回の調査では微地形縁辺の水田を確認した。水田は計算された水路配置を持ち、さらに東北方向へ広がる可能性が高い。また微高地の上にも耕作地が存在した可能性も考えるべきであろう。環濠集落がみつかった川西・根成柿遺跡が耕作者の居住地とすると、広域に耕作地が展開していたと見るべきであり、その広がりに注意が必要であろう。

最後に土地開発の問題である。橿原市南部地域では近年 9～10 世紀の集落が多くみつかっている。当該期は弘仁 13 年（822）益田池築造開始にみられる開発進展期にあたり、集落と耕地開発の関係、そして条里型水田開発の関係の解明が重要な検討課題である。こうした検討は 1 遺跡の調査のみで成し得るものではなく、今後集落だけでなく旧河道や素掘小溝の調査を丹念に続けてゆくことが望まれる。

### 註・参考引用文献

（1） 大野董氏は縄文時代集落は 1～3 棟で構成される小規模なもので、一定期間定住するものの継続的定住のではなく、こまめに領域内を周回する「弱定着性」をもった「回帰的居住」形態であったことを指摘している（大野 2010）。

大野 董 2010 「縄文集落における弱定着性と回帰的居住」『季刊考古学』第 114 号 雄山閣

岡田雅彦 2009 「観音寺本馬遺跡 - 京奈和自動車道（観音寺Ⅲ区）-」『奈良県遺跡調査概報（第三分冊）』 2008 年度 奈良県立橿原考古学研究所

近江俊秀・森島康雄 1995 「瓦器焼」『概説中世の土器陶磁器』中世土器研究会

岡田憲一 2000 「西日本縄文後期後葉土器編年序論 - 向出遺跡出土土器の研究 -」『向出遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター

- 川口宏海 1990 「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 小島俊次 1965 『奈良県の考古学』吉川弘文館
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
- 鈴木一謙・平松良雄 2008 「萩之本遺跡(川西町4区)」『奈良県遺跡調査概報』2007年度(第二分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- 玉田芳美・岡田憲一 2010 「近畿」『西日本の绳文土器 後期』千葉 豊編
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008 「橿原市川西町の調査」『奈良県遺跡調査概報』2007年度(第二分冊)
- 奈良県立橿原考古学研究所・(財)由良古代文化研究基金 1981 『大和田条里復原図』
- 三好美徳 1996 「南都における平安時代前半期の土器様相・土師器の供膳形態を中心とした編年試案」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1995
- 大和弥生文化の会 2003 『奈良県の弥生土器集成』

## 関連資料

図 43・44 検出遺構略図・遺構仮番号配置図  
(遺構の切合関係は全てこの図に記載。仮番号は報告書遺構番号に対応させている。)

表 2~4 報告遺物一覧 (1) ~ (3)

表 5・6 検出遺構および出土遺物一覧 (1) (2)

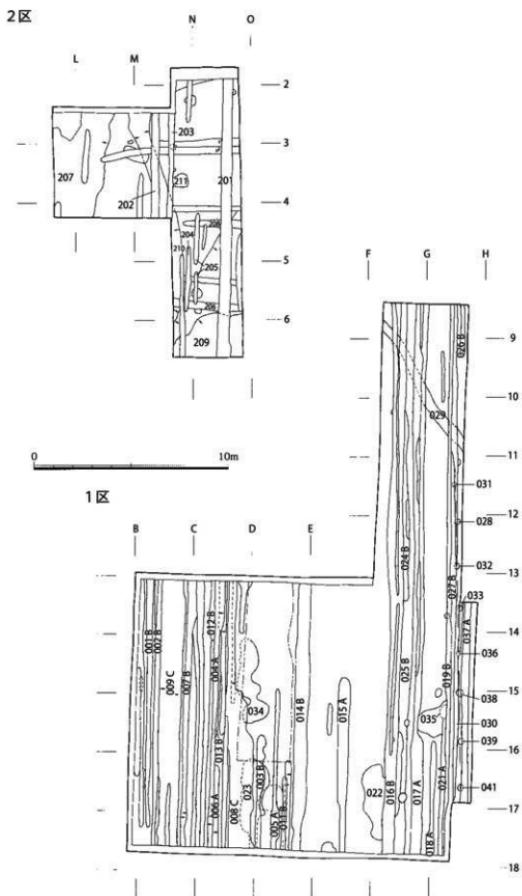


図43 第1遮構面遮構配置略図 (S:1/200)

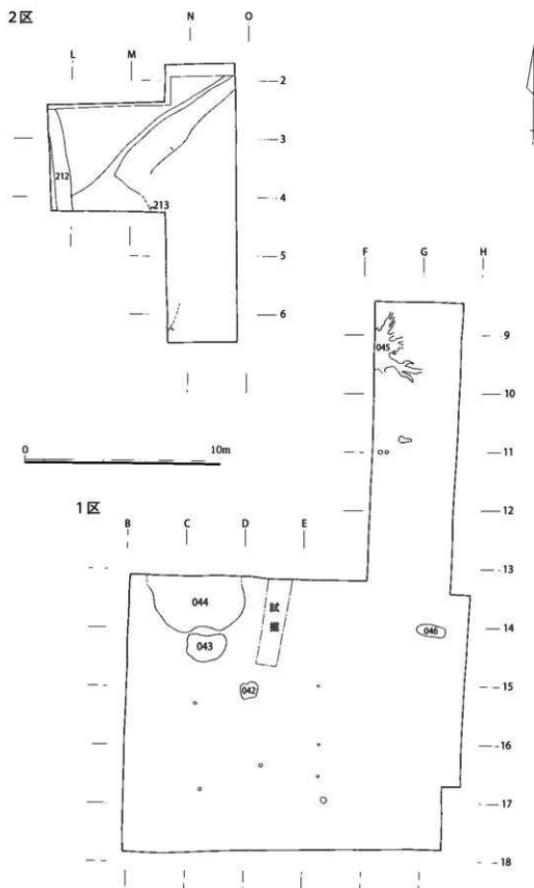


図44 第2造構面造構配位置図 (S:1/200)

表2 報告遺物一覽（1）

地区	山名・標高	種別	日付・測量・成形(㎝)	鉱土・素材	焼成・色調	特記事項
伊豆諸島		陶器				
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - * * - (3.0) - *	焼成 焼成	良 良	大輪山型 B-1型式
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.0) - * * - (4.0) - *	焼成 焼成	良 良	大和 H型
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(8.0) - 1.4 - * 40%	少少焼 良	良 良	標準 3336/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.1) - *	中少焼 良	良	成形 10YR7/4
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (4.5) - *	燒成 燒成	不良	成形モリーブ 2.5Y3/3
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	8.9 - 1.2 - *	良 良	良 良	標準 2.5WB/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	25%	- 1m石質・長石・カサリ繩 - 1m石質・長石・カサリ繩	良 良	
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	11.1 - 1.3 - 0.4 100%	ナツカイイド ナツカイイド	白黄色系 白黄色系	
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(2.7) - 1.1 - 0.4 95%	ナツカイイド ナツカイイド	白黄色系 白黄色系	
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.4) - *	燒成 燒成	良 良	大輪山型 B-1型式
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.1) - *	燒成 燒成	良 良	標準 A型式 標準 N3/3
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 A 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - *	燒成 燒成	良 良	標準 0.6A型式
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.5) - *	燒成 燒成	中少燒 良	標準 2.5Y3/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(13.0) - 4.0 - *	燒成 燒成	良 良	A類
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	20%	- 2m石質・長石・カサリ繩 - 2m石質・長石・カサリ繩	良 良	標準 0.7YR7/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(9.0) - 1.5 - *	中少燒 良	良 良	標準 7.5WB/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	25%	- 1m石質・長石・カサリ繩・黒色 - 1m石質・長石・カサリ繩・黒色	良 良	標準 7.5WB/6
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - *	燒成 燒成	良 良	標準 B-C型式 標準 2.5WB/2
伊豆諸島	1) 伊豆新島小崎 C 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(15.1) - (3.0) - *	燒成 燒成	良 良	標準 A型式 標準 N4/4
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	熱帯土層 中層部	* - (1.2) - *	燒成 燒成	良 良	A類
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	熱帯土層 中層部	(10M)EF -	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	熱帯土層 中層部	* - (4.2) - 6.4	中少燒 燒成	良 良	A類
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	熱帯土層 中層部	高台地 100%	- 3m石質・長石・カサリ繩 - 1m石質	標準 5YR7/8 黒 N 2/0 標準 0.7	標準 0.7 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.5) - *	中少燒 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(10M)EF -	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.3) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.4) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (3.2) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.6) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 N7/0
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(10M)EF -	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 N7/0
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.6) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 N7/0
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(10M)EF -	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 N7/0
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.5) - *	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	(10M)EF -	燒成 燒成	良 良	標準 7.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.7) - *	燒成 燒成	良 良	標準 5YR7/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (1.2) - *	中少燒 燒成	良 良	標準 2.5WB/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - *	燒成 燒成	良 良	標準 5YR7/6 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	* - (2.0) - (4.6)	燒成 燒成	良 良	標準 5YR7/6 標準 N3/3
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	高台地 50%	少少燒 燒成	良 良	標準 0.7 標準 0.7
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	2.3 - 4.2 - 1.2	石質 2次加工有孔部	良 良	大打石の可能性あり
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	6.7 - (20.1) - *	中少燒 燒成	良 良	大輪山 1 - 2 桟柱
伊豆諸島	1) 伊豆新島 S23 2) 伊豆新島	上層部 中層部	50%	- 4m石質・長石	良	

表3 船生源物—酯(2)

表4 報告遺物一覧 (3)

番号	出土遺物 種類	種類	寸法・形状・成形 (cm) 表面状況	地土・基材	焼成・色調	特記事項
IK-30-69	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (8.2) - 5.4	少少粗	良	
IK-30-70	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (4.0) - 2.8	細	良	
IK-30-71	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (3.0) - *	少少粗	良	
IK-30-72	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (5.0) - *	少少粗	良	
IK-30-73	1区 縄文時代の包合層	土器底	5.0 - 6.1 - 3.6	粗	良	
IK-30-74	1区 縄文時代の包合層	土器底	5.7 - 6.2 - 3.6	少少粗	良	
IK-30-75	1区 縄文時代の包合層	土器底	3.5 - 3.1 - 2.1	粗	良	
IK-30-76	1区 縄文時代の包合層	土器底	(1.2) - 1.7 - 0.4	サスカイト	凹屈無基盤	
IK-30-77	1区 縄文時代の包合層	土器底	5.0 -	サスカイト	凹屈無基盤	
IK-30-78	1区 縄文時代の包合層	G鉢	2.0 - 1.7 - 0.4	サスカイト	凹屈無基盤	
IK-30-79	1区 縄文時代の包合層	G鉢	100%	サスカイト	凹屈無基盤	
IK-30-80	1区 縄文時代の包合層	G鉢	2.5 - 2.1 - 0.7	サスカイト	凹屈無基盤	
IK-30-81	1区 縄文時代の包合層	G鉢	6.5 - 13.7 - 7.8	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-82	1区 縄文時代の包合層	G鉢	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-83	1区 縄文時代の包合層	G鉢	5.9 - 5.2 - 1.3	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-84	1区 縄文時代の包合層	G鉢	100%	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-85	1区 縄文時代の包合層	G鉢	6.1 - 4.4 - 1.0	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-86	1区 縄文時代の包合層	G鉢	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-87	1区 縄文時代の包合層	G鉢	3.6 - 5.6 - 1.1	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-88	1区 縄文時代の包合層	G鉢	7.2 - 7.5 - 5.6	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-89	1区 縄文時代の包合層	G鉢	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-90	1区 縄文時代の包合層	G鉢	7.2 - 8.4 - 6.1	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-91	1区 縄文時代の包合層	G鉢	(18.2) - (6.5) - (5.4)	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-92	1区 縄文時代の包合層	G鉢	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-93	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (8.2) - *	少少粗	良	
IK-30-94	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(13.9) - (6.5) - 6.5	粗	良	
IK-30-95	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	30%	~2mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-96	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (2.0) - *	粗	良	
IK-30-97	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (2.8) - (0.8)	粗	不直	
IK-30-98	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(17.6) - (6.5) - 6.5	~4mm石・粗石・チャート	粗	凹屈無基盤
IK-30-99	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	3.2 - 6.7 - 1.9	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-100	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-101	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(3.3) - 4.2 - 0.0	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-102	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	-	サスカイト	無脚縁 縫合有り	
IK-30-103	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(13.9) - 12.5 - 6.5	粗	良	
IK-30-104	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	30%	~2mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-105	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	# × (2.0) - *	粗	良	
IK-30-106	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(14.0) - (6.5) - 6.5	~2mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-107	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	25%	~3mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-108	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	1.9 - 1.9 - 1.8	~3mm石・粗石・黑色粒	良	云霧開品
IK-30-109	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(10.0) - (6.5) - 6.5	~3mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-110	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	2.0 - 2.0 - 0.0	~3mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-111	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(14.0) - (6.5) - 6.5	~3mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-112	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	2.0 - 2.0 - 0.0	~3mm石・粗石	粗	凹屈無基盤
IK-30-113	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	(13.2) - 2.3 - *	粗	良	
IK-30-114	1区 縄文時代の包合層	繩文土器	70%	~3mm石・粗石・雲母	粗	凹屈無基盤

表5 條出遺構および出土遺物一覧（1）

5-1号	遺構番	遺構名	種別	所見	出土遺物	地区
1区						
001	第1遺構面	表面調A			縦文土器調片、土師器（中世～）焼片、須磨器（古墳）焼片	
002	第1遺構面	表面調B			縦文土器調片、古式土器調片、土師器（中世～）焼・破片、須磨器（古墳）焼片	
003	第1遺構面	表面調C			土師器（中世～）茎・土器・1、黑色土器A種	
004	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）茎L・破片、瓦頂板	
005	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）焼片、須磨器（中世～）焼片	
006	第1遺構面	表面調B			土師器（中世～）焼片、黑色土器A種片	
007	第1遺構面	表面調B			土師器（中世～）焼片	
008	第1遺構面	表面調C			土師器（中世～）茎、須磨器（古代）焼、須磨器（中世～）束縛系、灰陶陶器種、黑色土器A種、サヌカイト石片	
009	第1遺構面	表面調C			土師器（中世～）茎・瓶、須磨器（古代）焼、瓦頂板、丸瓦	
010		欠番				
011	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）焼片	
012	第1遺構面	表面調B			土師器（中世～）燒片	
013	第1遺構面	表面調C			土師器（中世～）茎	
014	第1遺構面	表面調B			縦文土器調片、土師器（中世～）茎・燒片、黑色土器A種片	
015	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）茎・燒片、瓦片	
016	第1遺構面	表面調B			弁生土器調片、土師器（～古代）焼、土師器（中世～）茎・瓶、須磨器（古代）焼、黒色土器A種、瓦頂板（N-B-C）、サヌカイト石片	
017	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）焼片、黑色土器A種、瓦頂板	
018	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）焼片	
019	第1遺構面	表面調B			古式土器調高、須磨器（古墳）焼、黒色土器A種、瓦頂板、サヌカイト石片	
020		欠番				
021	第1遺構面	表面調A			土師器（中世～）焼片、瓦頂板（N四脚）	
022	第1遺構面	土机			土師器（中世～）焼片	PG17+18
023	第1遺構面	SK23	土机	10世紀半～後	土師器（中世～）瓶・瓶片、須磨器（古代）焼片、黒色土器A種・瓶、尾	DE17+18
024	第1遺構面	表面調B			土師器（中世～）焼片、サヌカイト石片	
025	第1遺構面	表面調B			弁生土器調片、土師器（中世～）茎・瓶、須磨器（古墳）焼、黒色土器A種、サヌカイト石片	
026	第1遺構面	表面調B			縦文土器調片	
027	第1遺構面	表面調B			土師器（中世～）瓶・茎、須磨器（古代）焼、黒色土器A種、瓦頂板、サヌカイト石片	
028	第1遺構面	SA30H	ピット		土師器（中世～）瓶・瓶・瓶片、須磨器（古代）焼・瓶片、サヌカイト石片	H13
029	第1遺構面	SD29	溝			GH9+11
030	第1遺構面	柱杭		10世紀半～後		
031	第1遺構面	SA30A	ピット		土師器（中世～）焼片	H13
032	第1遺構面	SA30C	ピット			H13
033	第1遺構面	SA30D	ピット		土師器（～古代）杯、黒色土器A種	H14
034	第1遺構面	SK34	土坑		土師器（中世～）焼片	DE15+16
035	第1遺構面	土坑			サヌカイト石片	H16
036	第1遺構面	SA30E	ピット		土師器（中世～）焼片	H15
037	第1遺構面	表面調A			縦文土器調片、土師器（中世～）瓶・茎、須磨器（古代）焼、黒色土器A種 or 瓶、瓦頂板（N四脚）	
038	第1遺構面	SA30F	ピット		土師器（～古代）杯、土師器（中世～）瓶、黒色土器A種	H16
039	第1遺構面	SA30G	ピット		土師器（中世～）瓶、黒色土器A種・瓶片、瓶	H16
040		欠番				
041	第1遺構面	SA30H			土師器（中世～）瓶・瓶、須磨器（古墳）焼、黒色土器A種、石萬片、尾・燒土	H17
042	第3遺構面	SK42	土坑			E16
043	第3遺構面	土坑				B15
044	第3遺構面	SK44	土坑	縦文土器調高	縦文土器調片、サヌカイト石片	CD14
045	第3遺構面	SK45	樹株	園化半寸	サヌカイト石片	GH9+10
046	第3遺構面	SK46	土机		縦文土器調片	GH14+15
表土:					縦文土器調片、弁生土器調・茎、古式土器調高・茎、土師器（～古代）瓶・瓶片、土師器（中世～）茎・瓶片、須磨器（古墳）焼・瓶片、瓦頂板、黒色土器A種、瓦頂板、穿孔罐片、須磨器（古墳）焼・瓶片、灰陶陶器種、黒色土器A種、瓦頂板、穿孔罐片、須磨器（古墳）焼・瓶片、瓦質土器調片、縦文土器調片、サヌカイト石片、平底片・丸瓦片、土師器（古墳）焼・瓶片	

表6 検出遺構および出土遺物一覧（2）

S-番号	遺構番	遺構番号	種別	所見	出土遺物	地区
2区						
201	第1遺構面	系剥離（南北）			土剥離（～古代）裏・縫片、須磨跡（古墳）縫・縫片、瓦窓跡（中世～）裏、黒色土 粘入縫片、瓦窓跡（古墳）縫・縫片、瓦窓跡	
202	第1遺構面	系剥離（南北）			土剥離（～古代）縫片、黒色土粘入縫片、瓦窓跡	
203	第1遺構面	系剥離（南北）			土剥離（～古代）縫片、土壁跡（中世～）縫	
204	第1遺構面	系剥離（南北）			土剥離（～古代）縫片、黒色土粘入縫片	
205	第1遺構面	系剥離（南北）			黒色土粘入縫	
206	第1遺構面	系剥離（東西）			土剥離（～古代）縫片、土剥離（中世～）縫片	
207	第1遺構面	SX207	自然地盤？	衛生時代中期	衛生土器（施墨者）縫・縫片、瓦窓跡、サヌカイト・鏡片	LM3～5
208	第1遺構面		系剥離（東西）		土剥離（中世～）縫片、黒色土粘入縫片、サヌカイト・鏡片	
209	第1遺構面	SD209	溝	古墳時代後期	衛生土器（施墨）・古式土器跡森林	06・7
210	第1遺構面	SD210	溝		土剥離（中世～）縫片	
211	第2遺構面		土坑			N4
212	第2遺構面	SD212	溝	水田と田跡帶		1.3～5
213	第2遺構面		溝	水田と田跡帶		N5
洪木砂					縄文土器深鉢・縫片、衛生土器蓋	
耕作土					縄文土器深鉢・縫片	
褐色土 (耕土以下)					縄文土器深鉢・縫片、サヌカイト・鏡片	
暗褐色土					縄文土器深鉢・縫片、土	
綠灰砂					縄文土器深鉢・縫片、サヌカイト・鏡片	
黄砂					縄文土器縫片	
表土					縄文土器深鉢、土器跡（～古代）縫、土器跡（中世～）縫、須磨跡（古墳）縫・縫片、 瓦窓跡、黒色土粘入縫片、瓦窓跡、輪入骨塗跡、白窓跡、瓦窓跡、瓦窓跡・すり跡、サヌカイト・鏡片、甲瓦	

## 写真図版

※遺物写真の番号は報告番号に対応



図版 1



調査前風景（南西から）

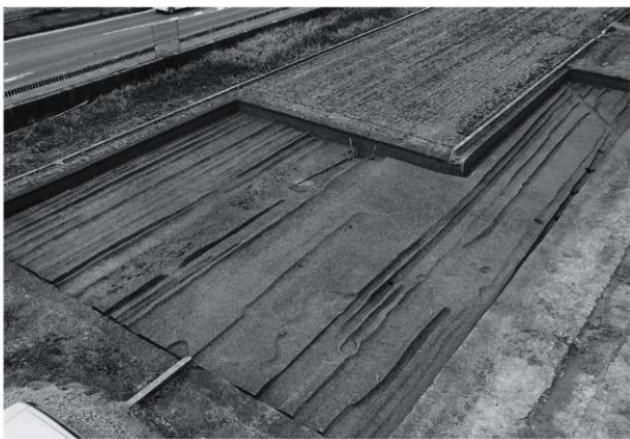


1区第1造横面全景（北から）

図版2

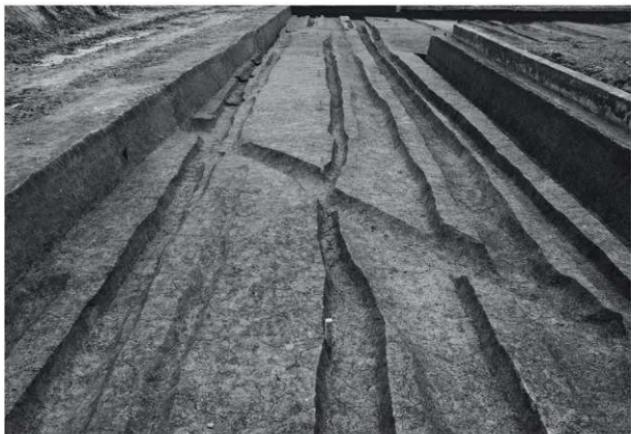


1・2区第1造横面（南から）



1区第1造横面全景（南東から）

図版3



素掘小溝A（北から）

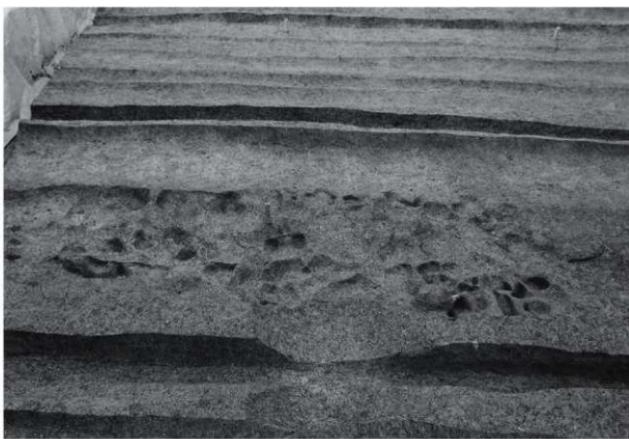


2区第1造横面（西から）

図版4



SK23 土層断面（西から）



SK23 完掘状況（東から）

図版 5



SK33 完整状況（東から）



SD29 土層断面（東から）

図版6



SD209 完掘状況（北東から）



SD209 土層断面（北東から）

図版 7



SD210 完掘状況（北から）



SD210 土層断面（南から）